本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

# 世界婦人

◎本號目次


▲戀愛問題と生活問題（一）安部磯雄
▲無頭無尾（一）赤羽巖穴
▲浮草（一）女學生
▲犠牲（三）渚石子
▲新紀元晩餐會（三）小野吉勝
▲奉行の意義（四）大石禄亭
▲二人り姉妹（五）某氏
▲日本婦人の性格（五）瀬尾雪波
▲公債を敎へ（六）相良崇陽
▲不義の子（七）西川さつき子
▲農科と理科（八）増田操
▲遊說に就て（續）（八）小野有香
▲谷中問題の判顛及び敎訓（八）久保田牧民生
▲さすらひ（九）神川松子
▲靈乎否乎（九）ゲラく生
▲對新平民觀念の地理的現象（十）みよしの
▲足痛み（十）德永狂風
▲田中翁及び幸德秋水氏の消息（十二）
▲海外時事（二）
▲海内時事（三）


## 戀愛問題と生活問題

安部磯雄

若し青年男女の心を解剖したならば、己が愛する所の人と自由に結婚の出來ることを何ものよりも願わい事と思ふて居るに相違ない、結婚といふことは兎に角人生の一大事であるから、青年男女が自らの選擇に依りて其配偶者を定めんことを欲するのは至極尤の事である。今日も尚は保守的思想を有する人は自由戀愛といふことを危んで居るけれども、結婚の理想が茲に在ることは決して疑ふことが出來ぬ。吾人は男女問題を考ふる毎に其根本的解決が自由戀愛てふことにあるを信ぜざるを得ない

青年男女が自由戀愛を切望して居るに拘はらず兩親達が尚はこれを是認せないのは恰も參政權を要求するの聲が人民の間に高いにも拘はらず政府がこれに賛成しない樣なものである。斯る場合に兩親達の頑迷を攻撃するのは餘り効力のないことで、余は寧ろ青年男女が自ら此問題を解決せんことを望む。若し人民に實力があれば政府に突貫して政權を要求するまでのことだ。若し政府にして尚は承諾しなければ、人民は租税を納むることを拒で其反省を求めさへすれば宜い。これだけの覺悟が人民に在れば參政權を得るが如きは何の造作もないことである。今日の青年男女が思ひ分つて理想的戀愛を遂ぐることの出來ないのは、其兩親に在るといふより寧ろ彼等自身にあるといふのが適當であらう父母や親戚に迫られて、終に美はしき戀愛を棄てる青年男女があるが、隨分意氣地なき話ではないか。余は彼等の無節操、無氣概を嘆息するものである

然れども退いて考ふれば彼等が父母親戚の反對に遇ふて其戀愛を遂ぐることの出來ないのは、彼等に勇氣の乏しいのでなく、節操のないのでもなく、全く生活の獨立なきが爲である。彼等は父母親戚を離れて生活するだけの腕が出來て居ない時に早や戀愛問題を考ふるが如き輕擧を爲すのである、此の如き青年男女の戀愛が種々の妨害に逢ふのは決して怪むべきことではない余は茲に斷言したい。生活問題の解決せざる前に結婚問題を考ゆるが如きは無鐵砲の甚しきものであると

男女の情死には種々なる理由もあらうが、彼等に生活の途なきことが最大なる原因であるに相違ない。若し彼等が自己の手腕に依りて衣食することが出來るとせんか彼等は必ずあらゆる妨害を忍んで双樣の幸福を全ふすることであらう余は青年男女が自由結婚を爲すことに賛成する然れども獨立の生活が出來ぬ前には決して戀愛問題を考ふるが如きことを爲してならぬ

余の說を非難するものは必ず言ふであらう、戀愛は盲目的であるから、生活上の打算をなしたる後にあらざれば決して考へてはならぬといふ如き理解的のものでない。生活の事も、生命の事も打忘るるに至る所が戀愛の最も美はしき點ではないかと。然れども此の如き議論は決して健全なる思想であるとは言へない、若し戀愛心の起るがまゝに任せて置くといふことであらば今日の青年男女は中學校や高等女學校時代から戀愛の事を考へても差支なしといふとになるではないか。吾人は學生時代に於て種々なる戀情を抑ゆることを以て必要の事と思ふが故に、戀愛に落つることを豫防するのは適當であると信ずる。多くの青年男女が戀愛を以て小說的に考へて居るのは抑も誤謬の始まりである。生活問題は人生の確實なる事實であつて小說的空想ではない。余は多くの青年男女が生活問題の爲に其戀愛を遂げ得ざるを見て、痛く彼等の爲に悲むと共に、亦彼等の無謀なる輕擧を責めざるを得ない

## 無頭無尾

赤羽生

▲結婚は法律の名に淨められたる、神聖なる賣淫と賣淫との聯合也。ジョン、スチュアルト、ミルが罵倒して『夫婦は法律に依て承認されたる一種の奴隷なり』と云へる、又た此の意味に外ならず。

▲樂しき家庭とや、嘘飾すべき哉。今の世に於ける家庭とは、法律と道徳の名に裁可されたる一種の地獄也、而して夫と婦とは此地獄中に踠きつゝある憐れむべき色界の亡者也。

▲結婚と賣淫とが、現社會に於ける必然の隨件物たるとは、猶ほ影の形に伴ふが如し。宜いかなべーベルの言「結婚と賣淫とは、恰かも貨幣の表面と裏面の如し」と、

▲世界の男女を二分して、其の一半は夫婦也、他の一半は賣淫夫と賣淫婦也。然れども仔細に觀ずれば、夫婦と稱する者も多くは賣淫と賣淫の餘儀なくされたる結合ならずんばあらず。あゝ世は滔々として痴男痴女の淫樂淨土なるか。

▲道徳の帽子と、法律の上衣を以て賣淫夫と賣淫婦の醜態を掩ふ。之れ結婚也。

▲悲哀の極には慟哭無く、涙無きが如く、深刻なる戀愛に惱める人は冷々として木石の如し、默々として花に胡蝶と舞ひ狂ふの輕薄才子、豈に深刻なる戀愛を味ふの資格あらんや。

▲熱情火の如き殉教者の流せる碧血の上に、文明の美くしき花は咲く。冷々默々たる阿彌陀が人知らぬ戀愛の惱みに濺ける紅涙の中に人情の麗はしき果實に生る。

▲憐れむべきは人の子なる哉。父と母とが快樂の犠牲と爲りて偶然世に生れ出で、而して孝養の義務を盡すべく餘儀なくせらる。

▲男女問題はパンの問題也、生活の問題也。故に男と女とが經濟的に平等の地位に立ち得る時迄、男女問題は完全に解決せられざるべし。

▲賣淫は、警察、軍隊、教會と相駢んで資本家制度の現社會を輝かしつゝある四大火柱也。而して賣淫は女子の貞操を殺し、軍隊は個人の自由を殺し、警察は個人の肉體を殺し、教會は個人の精神を殺す。此の點より云へば四大火柱即ち四大殺柱たる也。

▲子供は貧乏人に取つては一種の生活資本也。貧乏金は造る能はざるも、切めて子なりとも造り置かば、老後餓死する氣遣ひは無かるべし。貧乏人に子澤山の理、茲に於て乎多少の眞理あるを見る。あゝ人間の資本、悋は即ち悋なりと雖も、今の社會に於ける勞働者の肉體は皆資本家と稱する尻肉屋の資本なるを思へば、吾人は格別驚くに及ばざる也。

▲勞働界の婦人よ團結せよ。汝の失ふ所は恥台の鎖と男子の橫暴の鞭にして、而して汝の得る所は世界の半なるにあらずや。

## 浮草

女學生

無極の天より天に消え行く、虛空の星影暫し輝けばうらあかき夕露も、今はいづこえか、天籟の響もなく、せせらぎの音かすかに、澄み行く谷間の水の、細く絶えだえに、何をか囁く。アア寂しい夜。

力無きハートの荒きすさびに、堪え兼ねて幾度となく、眼を閉ぢ樣とすれど、戀は昂がり想は激して、あかき血の音、ここと、もろもろも苦しあゝもういつその思ひで結婚を？けれどもあんまりだわ、御父樣にも御母樣にも申譯無いけれど、こればかりは、どうしても。生意氣だと云はれても仕方が無い。私には、結婚の價値が無いのだから。小供を産で主人の機嫌を取つて、臺所にまごついて、時々ペロペロの著物を着て人の前に出さ張つて、笑つて、泣いて、怒つて、すねてそれで淑慢らしくワイフ然と澄まして居るのが私はきらひですから、そんならどうおしるのだゑと、若し母にでも問はれたら、どうしませう。私は誠に困るです。欲求もありませむこても、かなはないから。覺悟して欲求を自ら無くしてるるのです。即ち漂流的の大々人物なのです。死なうか、生うか、ねようか、起きようか、働こうか遊ぼふかと、心はたづねて居るけれど、今によい決斷も、出ないで誠に困難してるうまく此世の富をにぎりしめたものが、多くの此世の人の努力に依つて無された文明の幸福を專有して、外の物は泣き泣きもまだ其富者の前にひざまづいて、文明のために働いてる。馬鹿らしいでは無いか。生きてるのも、あまりおもしろくも、ない感じがするけれど、死ぬるのも怖い。天國には天女があるときいてるが、地獄には鬼が居るそうだから、もしも鬼の居る處に居たら恐ろしいからよして置く。天國のホロビの門は廣いが、ホロバ無い門は狹いそうだからなんでも若し死ぬる時は、淋しいから、門の廣い、佇れの多い方へ行きたいものだ。

女子大に讀むべく男子盛んに讀まざる可からず



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

## 英國女子の政治運動

▲英國の女子今や「我等に選擧權を與へよ然らざらば死を與へよ」と叫んで居る。世間では面白半分素見半分に之を聞流してゐる。併し「我に自由を與へよ然らざれば……」と志士の叫んだ聲も一時は世間から冷笑を以て迎へられた事もあつた。英國女子の政治運動も決して輕忽に附すべきものでない。

▲英國女子の政治運動は今日に始まつた譯ではない。暴動を企てゝ警官の厄介に成つたのも今回（一月十七日）で四五度になつて居る。

▲彼等が政治運動の歴史を尋ぬるに其發端は遠く半世紀以前に溯つて居る。而して政治上の男女同權の法案は數次議會に提出されしに拘はらずいつも其法案は廢棄若くは握潰しの厄に遇つて彼等は一度も滿足を得た事がない。

▲然るに彼等をして益々其運動を烈しくさせた一つの動機が出來た。其は今より六年前の事だ英蘭と愛蘭との中間に一小島「人島」と名くる者がある。此一小島は自治の島で、一小議會を有して居る。此議會は六年前の通常會議に於て「寡婦と獨身婦人とは選擧權を有す」と決議した。乃で婦人連中は一段の元氣を加へて激烈に運動を開始し各都邑に運動の本支部を設け其機關として「婦女參政誌」と云ふを發行し併せて宣言書を發して曰く「我等は女子選擧法案に贊成する候補者を當選せしむるために加勢運動をなす」と

▲彼等の應援を以てレーバアー、パーテー即ち勞働黨から五十一人と云ふ多數の議員が選出せられた。此際選擧運動者として最も目覺ましい働きをしたのはワルヰック伯爵夫人であつた。世間では綽名を付て「社會主義奥さん」と云つて居る。夫人は勞働黨候補者ウヰリヤム、サルン氏の爲めに運動して、倫敦の最貧市街を廻つて大道演說をして歩いた。

▲それから彼等は女子に選擧權を與へるか否やの最後の通牒を首相に送つた。キオメル、バンナマンは返答をしない。これが一昨年三月の事であつて、同月九日には彼等の中に三十名の代表者が隊を組んで首相邸に押掛け、警官の說諭に反抗して傘の棒を以て窓ガラスを突毀した者もあつた。で警官も止むを得ず其首領らしいミルラー孃始め數名の婦人を拘引した。之が第一回の暴動である。

▲彼等は昨年の二月九日にも又々一大示威運動をやつた。是れは前回と趣を異にして二千人ばかりの大勢にて三列四列となりハイドパークと云ふ公園を基點として倫敦市中を練り歩きネルソン提督紀念碑の所で大道演說をやつた。其中には歴々の者も交つて居て、ケヤー、ハーデー氏なども加つて一塲の演說をやつた。

▲其後も一二回議院の前の鐵柵の側で警官と彼等との衝突があつた。此度も例の調子で騷いだ樣子は電報によつて想像されるさても元氣な者だ。されど、彼等の前途はまだ〳〵遼遠と云はねばならぬ。（以上二六新聞）

## 英國の「教會社會主義者」

近頃吾人の肺腑に入つて最も意を強うしたのは英國に於ける「教會社會主義者同盟會」の設立である。主に英國の高等教會の高僧達の發意になつて、趣意は英國の宗教界に大覺醒を與へねばならぬと云ふのだ、「樂天主義者」と云ふのがその機關雜誌だ、現在非常な意氣込みで、此の冬期間に一百回以上の傳導演說をなす都合で運動して居る、我れ等日本人は何だか羨ましい樣だ、日本の宗教界は此のまゝ眠り續けるのか噫

## 歐州の社會主義者

現今歐州に於ける政事科の學生に最も強い印象を與ふるものは獨、佛、伊、墺、露及びスカヂナビアヤ諸州、ネザーランドの諸國に於て社會黨が大勢力を得て來た事である。社會黨に屬するものゝみにあらず、革命的社會主義者に屬する投票人の數は今著々として增加して居る。素より色彩の不同は各國皆、其の國狀のいかんによつて個有であるが、大體は、この資本と勞働との問題を腕力によりて解決せんとする傾向がある、或はこの種の革命的辯論をば直ちに社會主義と唱へて居る所もある、例へば佛國で其の實、嚴重なる意味から云へばチットも社會黨とは云へないもんだ、たゞ、あのアメリカのヘヤストがなしたと同じ告示を、こゝで實際になして居るばかりだ、されど各國の社會黨は實に工業的革新のために起ち、その絶ゆる事なき辯論は赤き社會主義の熱火に益々花を咲かせ、その焔は大光明を發して今や歐州の恐るべき一大勢力となつたのである。

全歐に渡りて社會主義の勢力は、その社會主義的法制の萌芽によりて大方は察せられる。獨逸のビスマルクは社會主義の發達を阻害したる鐵道國有案、養老院、強迫保險などを認可したを以て不當だと云つて獨逸の貴族からすごい攻撃を食つた、そしてこれ等の改良案を見てビスマルクは「我れは獨逸に於ける最上の社會主義者なり」と反語的に宣言した。

歐州で最も進化した國の都府は、大抵、社會主義者が其市會に大多數を占めて、万民の受もよい、彼れ等は何處でも、先づ小兒のために法律を制定し、工塲や、坑山や、帳塲や、はげしい勞働をする商店などから小兒を救ひ出して、學校に入れ食物を給し、衣服を着せる、又小兒や老人や産婦のために慈善病院を設立し、藥舖を備へ、或は市立の燒所「パン」や料理店を設けて、貧乏人に實費で食物を供給し、需要によつてはどこへでも自由に配達すると云ふぐはひだ一言以て之れを蔽へば、彼れ等は常に先づ都市に走り勞働階級のためにばかり、狡猾者流をしりぞけ、賦税を增さで我が財嚢を肥やし、租税をのがれんとするものを注意してこれを所罰し社會主義者が市政に參與する樣になつてから、人民の利益を增加した事は非常なものであつてモウ今後はいかなる事があつても市會から社會主義者を追はんとすることは斷して出來ないであらう、要するに全歐州の思潮は着々何國かも強烈に協働共產主義に傾いて來た、大革命は直ちに來り、万づの事は今や成らんとす、人の情慾に因るに非ず、人の意志によるにあらず、誠に神の意志によつて來る、機械力より起つた經濟的革命はたゞ社會主義のみ、自由と、饒富と平和とに至る道程である事を誰れか否定し得んやである。

## 犠牲!!

上　　活石子

僕の社は出勤時間が七時だから、どうしても六時過ぎると出掛けなくてはならぬ。或朝いつもの如く六時十五分に出て辨當片手にテク〳〵やつて來ると、茗荷谷の門のところで出會つたのは、紫色の小布呂敷小脇に、洋傘を杖いて、紫紺の袴を穿いた、學生姿の美人。正直のところを白ふと、僕には天下の婦人が、皆美しく見えるが、今日の婦人は僕如何に中立の態度を取つて、公平の眼を以てしても十人以上であつた、そしてその婦人が優やかにこのむくつけき僕に對つて會釋せむとは！全く豈圖らむや大ひに面喰つた。應揖はしたものゝ、曾てかゝる美人と知つたとが無い、いくら考へても考ひ出ぬ大方、あの婦人奴、記臆の金蘭帖を丁違に端繰つたんだろうとは思つたが、全くそうさしてしまふのはまことに惜しい、如何にかして考ひ出そう、出なければ知つた振りをしようかとも思つた、考ひ考へ、相前後して江戸川の停留場まで行つた、電車へ乗る、その婦人も乗る、飯田橋で四谷行へ乗換える、その婦人も亦乗換えた弱つた、こんな困つたことは無い。新見附へ來ると、彼の婦人は降りた、降りてしまはれると乗つてる内に、考出さなかつたのが殘念でたまらない、がらす越しにその後姿を見送つて居ると、新見附けを這入つて行く、三輪田女學校の生徒かしら………

中

ア、思當つた。三年ばかり前、大塚に住んで居た時分、近所の古河といふ人のところへ、能く泊りに來た娘があつた、その時分はまだ十四五の少女、妻君の妹だそうで、その姪なる、二人の女の子と打連れて遊んだ居たのを思ひ起した。僕はその妻君に、何處の學校へ通つて居るのかといふて尋ねたことかある、妻君は、面目なけに、不如意なものですから、學校へも上けて置く譯に參りませず、高等三年を卒えたばかりで、この春から交換局へ出しました、と、こう答へた。

新見附……女學生姿……たしかにそれに相違ない。その後亦出遇つた、モウ心を置かぬ、色々話しもした、語り會つて見ると、その心性も優にやさしい、僕は此婦人にも福音を傳へて、新生命を與へやうとした、讀みがらの世界婦人を與れたこともあつた。會ふことが一度は一度より親しくなつて來る、慕はしき心も增して來る。しかし、彼婦人は泊りもある、遲出もある、會ふことはホンニ時偶なので、常には出動時間の氣遣はれて、遲くもどかしくてならぬ電車も、その時ばかりは、馬鹿に速く、新見附までの距離の近いのを憾まれる。連れになつたり、一人だつたりで、二月ばかりすると、彼の女はフッツリ通はなくなつた、氣遣ながら一月ばかり過ぎたが、影も見せぬ、アアどうしたんだらう？。

下

彼女の通はずなつたも道理、一月ばかり前に、あの姉なる人が、十二と七ッになる二人の娘を遺して産後の肥立惡しく、遂に歸らぬ旅に赴いてしまつたといふ、そして、多分逆緣になるだらうといふことを聞いたときには、僕は驚かずには居られなかつた、悲しまずには居られなかつた、まだ十八九ばかりの處女を、四十にも餘らむ鰥兄なる人に、二人の幼き姪が可愛そうではないか、兩家の都合は此上も無いといふ、一家の悲しみ、さては、可憐の遺兒を口實に、可惜、彼女が神聖き生命、火と燃ゆる全身の戀は、蹂躙られ、犠牲とせられてしもうかと、胸つぶれ、口惜し涙にかき暮れた。アヽされど、彼れ年若く心怜悧しければ、堅剛な父母、親姻の仕打に猛然たる反抗の火焔を擧けて從はぬであらうか？、しかし、何をいふにも心弱きは女なれば………

今日の日曜は珍らしく上天氣、秋は垣の外なる柿の樹へも來て居る。チッとして内に引込んで居られない、友達を誘ひ出して、近郊に栗の實にても拾はんものと、江戸川の畔へ來ると、兩岸の櫻は央ば葉を篩落され、見るも荒涼たる有樣である、その下を所狭きまで打積む落葉を蹴て、電車の方へ歩んで行く、親子の四人連、樂しく一日を上野か淺草あたりで暮さうといふのであらう、餘り年若き妻もてる男の妬ましく羨ましければ、横目に睥め附けて行き過ぎやうとして端なく顏見合はせた、その婦人は……ア、その婦人は……母親然な甲斐しき子供の世話振り！、憐れむべき、舊思想、舊道德の犠牲！！



Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

**海内時事**

## 福井縣の藝妓學校
（線香代が敎育費）

福井縣武生町には目下八十餘名の藝妓ありて其高等小學卒業者僅かに二名他は皆境遇上遊藝練習の外何等の敎育を受くる事もなく徒らに猥談淫語に日を送れる有樣なるが武生警察署長木村米次郎氏は之を憂ひ組合取締等に勸め特殊學校を設立せしめ淑德學舍と稱して二十五歲以下の藝妓六十四名に對し午前八時より十二時迄四時間讀書、算術、習字、裁縫、修身等を敎授し無屆缺席者には過怠金廿五錢宛を徴する事としたるに其成績極めて良好なりと云ふ其舍費は賣揚花代一本に付き三厘宛とし昨年中の賣揚花數二十七万六千本に對し已に八百二十九圓を集め得たる事なれば一兩年中には設備も完全にし專ら其發展を計る可しとは奇特なる計畫と云ふべしと或紙上に掲載されしを見て頗る快感に打たれぬ、希くは彼等の職業をして神聖ならしむる方向に進んで好模範たれ由來藝妓其者の職業たる毫も醜業に非ず然るに世人の之を醜業婦と稱する眞に故あり愼慨一番せずして可ならんや、希くは自覺せよ

## 引手茶屋女將の自殺
（吉原京町の櫻木）

去月廿七日午前七時廿分頃吉原京町一丁目廿一番地引手茶屋櫻木事大出キク（四十）方の下女中尾ツネ（二十）が勝手元にて炊事を爲し居たりし折柄女將の寢間にて悲鳴を揚ぐるを聞きたれば直に六疊なる同室に赴き見しに女將キクは右手に長さ四寸幅五分の小刀を以て右頸動脈を切斷し血潮は兩膝を緊と括れる白縮緬の扱帶を紅るならしめて虫の息となり居れるにぞツネは仰天して養女トメ（十二）及び抱藝妓小まん事佐藤キン（二十）と共に出張したる時は既に絕命して手當の施す可き樣もなかりし由▲覺悟の自殺　原因は負債の爲めにして蒲團の上に油紙を敷き血の流れ出でざる用意をなし一脚の机には樒の花及線香を立てたるなど覺悟の自殺に相違なく傷は深さ六センチメートル長さ三センチメートルあり死體は養女トメ幼年なれば前記の抱藝妓小まんに引渡されたり▲六通の遺書　室內には六通の遺書認めありトメに宛てたるもの最も長くして品行正しき女になれと繰返し其他の一通の中には金子をさる方より借用せしも返濟し難きより死を決せし旨認め有りし由尙一說に依れば文學博士重野安繹氏より多くの開業資本を借受けしも近年の不景氣にて思ふ通り返金し能はず博士に申譯なしと思ひ詰たるなりしとも云ふ▲同人の素性　同人は深川仲町元結問屋大倉萬右衛門の娘にして幼くて新吉原揚屋町餅菓子屋櫻木の養女となり十二歲の時我から望みて同所かつぶし家より小絲と名乘て半玉に出で後には江戶町一丁目に御神燈を揭げて姐さん株として鳴らしたるが足を洗つて日本橋馬喰町雜貨商明石屋に嫁したるも程なく又も仲の町の泉虎から再勤する事となり今度は甲府の紳商秋螺に落籍されしが之も手切て柳橋より櫻木のおぶんと名乘つて現はれしを勸むる人あつて吉原に戾り四年前までは仲の町の姐株と云はれ居たりさるに日本橋濱町二丁目の鳥料理筑紫の主人に思はれて夫婦となりしが一年許にて別話となり又々吉原に戾り小まんキンなどの抱妓を置て藝妓家を爲し居り一昨年五月故松の家露八が家を買入れ贔負なる重野文學博士などの手にて資本を借り建直して現在の引手茶屋櫻木を開業したるなりと如上の事實こそ眞に憐殺の極みならずや自殺するの廉耻心あればこそ此の憂き世の人に親昵せざりしなれ、吾れは思ふ現代の勝者は破廉耻、惡慢、殘酷、極惡の人非人なり斯ゝる敗者こそたしかに天國の門に入るの人なり、其覺悟の有樣や實に丈夫も耻なからめ哉

## 社會黨員送らる

去月十七日夜本郷弓町二丁目一番地平民書房にて金曜講演開會中々止解散の命に服せざりしとかにて堺利彥、大杉榮、山川均氏外三名は目下東京監獄に入獄中なるが罪名は治安警察法違反なりとぞ此寒天に際し主義のためとはいへ眞に氣の毒千萬

## 學士號と結婚
（夕に結婚して朝に離緣）

學士や博士の稱號が其れほどにも有難いものか人格が卑くても材幹が乏しくても單に學士といふ號があれば忽ちにして富豪の花婿に成り了せる世る狀さても可笑しや爰に學士の稱號と結婚せんとして失敗せし富豪の令孃こそあれ小石川區高田老松町卅八番地に住める東京府會議員にて秀英舍取締役兼支配人たる相川尙濟氏の令孃輝子（二十）は嘗にお茶水高等女學校を卒業後日本女子大學に入學せしも事情ありて中途にて退學し其後は實母仲子（五十）の膝下に在りて所謂淑良のお姫樣なりしが本年五月中媒妁人ありて小石川區表町百〇三番地農產物販賣家庭農園主太田轍氏（三十）と婚約整ひ日比谷神宮奉齋會に於て華燭の典を擧けしも當時太田家は農園新設中なりしを以て結婚後も輝子は尙里方にあり六月六日初めて落成せしを以て太田方に引取られしが名に負ふ富豪の令孃とて簞笥長持の荷物二三丁も引續き剩さへ一人の女中さへお伴して嫁入せしほどの始末にて夫婦仲も至極睦まじかりしが越て七月に至り相川家は突然太田氏に對して「農科大學卒業の學士と聞きし故愛孃を遣はしたるに實際は然はなくて單に實科の卒業生と聞きて驚き入りたり加之相川の娘ともあらふものに大豆や玉葱の小賣りをさすべく店へ出すとは以ての外なり相川家は其なん詐欺師の如な男には娘を吳れて置れぬ故一日も早く戾して吳れ」との掛合ありきさて此の太田と云ふ人は果して學士號を詐りてまでも嫁を迎えねばならぬ程の人物なりや否や其身分を聞くに同氏は長野縣小諸の舊藩士にて同縣中學卒業後東京帝國大學農科大學實科に入學し卒業後一年志願兵にて陸軍騎兵少尉となりたるは今より十年前の事にて其の後米國に渡り實業に從事し居る中たまく卅七八年の戰役の爲めに召集せられて歸郷後某師團附となり外國語に巧みなる處より外國觀戰武官監督補佐として戰地にある中不幸にして騎兵隊の襲擊を受けて脚部に負傷しながらも土耳其の從軍武官を包圍中より救ひ出せし功に依りて外國武官一同より金二千圓西班牙帝室よりも勳章を賜はり凱旋後は一人の叔母（七十）を國元より呼寄せて前記の處に模範農產物の種子及五穀類の販賣を始めんとする矢先き媒妁する人ありて輝子を迎へたるなりとぞ尙農學士の一件は太田氏自之を吹聽せしにあらず其間に立ちし仲人が單に農科大學の卒業と言ひしを相川家にて一も二もなく學士と信じ充分に其身元調査をせざりしに依れりと惟て二三回交涉の上輝子は去月六日を以て斷然離緣となりて里方に歸れるが相川家の言條は太田は詐欺師の自稱學士にして簞にもかゝらぬ放蕩兒なりと罵り太田方にては「アンナお姫樣育ちの嫁は勿論富力に釣合はず俥に乘つて一里も遠くへ髮結に行き夫婦寢起き夜具布團を女中に上げさせ臺所へは只の一度も顏を出した事のない嫁樣は今時に珍らしい早く引取つてくれて恭けない」と負けず劣らず相手の惡口をなし居れり正邪曲直何れに在るやを知らざれども男子は權勢に媚びて名門の婿たらんと急り女は虛榮心に驅られて學位ある人に嫁かんと思ひを焦す世の中に面白き出來事といふべし是は少し舊聞に屬すれど、餘りに世の中の頑冥固陋なる親達や現代の敎育を受けつゝある所謂良家の淑女と稱するお孃樣達の痴愚なるに驚き、斯る痴呆の親や娘を筆誅して見たいと思ふ抑も是等の人達は結婚を如何なるものと思ふて居るのでしやう權勢と黃金の前に奴隸たるを以て結婚の要素と心得てるのでしやう、現代の敎育は男も女も只々得んとするものは是なんでしやう淺ましきかな、學士號ある汽車の旗振りや電車の車掌もありといふに

## 軍人は嫌です
西大將の嗣子廢嫡事件

敎育總監陸軍大將子爵西寬二郞氏の嗣子休暇陸軍少尉鱗雄（二十）は昨年八月來二十餘名の高利貸より七万餘圓の借財をなして赤坂藝妓江戶花と云ふに現となり果ては去三月三千圓にて落籍して四谷仲町三丁目五十番地に一戶を構へ本名武井ツルの表札を懸け本邸へは更に歸らずして入浸りの有樣なるに西大將は持餘し遂に辯護士樣村幸一郞氏を訴訟代理人として家督相續人廢除の申請を東京地方裁判所に提出したる該事件は民事第一部池田裁判長の係りにて去月廿三日原告代理人樣村幸一郞被告代理人牧野隆男兩氏の口頭辯論ありしが去廿七日本人訊問ありて明日判決を言渡さるゝ事となり閉廷したるが其應問の模樣を記さんに先づ鱗雄は裁判長より其居所を訊問せらせて前記武井ツルの家に止宿せりと答へ何故本邸に戾らざるやとの追問に對し歸ればツルと同棲するを得ざればなり而して友人又は無知の人を介して借受けし金額は一寸槪算せる處によれば七萬圓程なりし故利子等にて彼是れ十萬圓に餘るべくツル一人の爲にのみ費消したり私は腦神經衰弱及び肺尖加答兒に罹り居りて身體羸弱なれば軍人は嫌ひです其れにツルとの間にはツルを正妻となして生死を共にするの堅き約束あり然るに父と華族條例とは此結婚を許容せず假に許さるゝとするも家名を汚すこと大なるのみならず華族の樣な窮屈な生活を欲せざれば斷じて相續するを欲せざるなり目下或事業を計畫しつゝあれば負債なる者は無論獨力にて辨濟する考なりと陳べ裁判長より其力は醜業婦との約束を固持して父に迷惑を掛け家名を汚損するを尙是とするやと詰られて然り相當と思ふと軍人口調を以て平然として應へ更に祖先の後を繼ぐは子としての義務ならずやとの問はれて前記の事情なれば止むを得ずと陳述す裁判長は尙負債額十萬圓とは誇大ならずや其力の陳辯は普通人の考へ及ばざる處なるが左樣な事を放言して毫も憚らざるは耻と思はざるかと詰りしに誇大にあらず且つ耻とは思はずと答へしよし樣村氏は起て被告は一萬五千圓の證文にて實際は僅かに現金九百餘圓を受取りし事實さへあり斯の如き次第なれば實際消費せる額は僅少なるも其十萬餘圓に上れるとは疑ひなきが如しと陳べたり如上の事實のみにては鱗雄氏の性行を知悉するに難きも此紙上に顯はれたる處に依れば實に貴公子間には破天荒の事實ならん、吾は暗愚膝に等しき紈袴子弟より兎に角人生を知らんと欲する健氣の鱗雄氏を見る希くは健在なれ氣の戀愛も知らず、親の俸祿を得んために其肉體も精神も犧牲にする大痴呆を世は舉て稱贊するに



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 孝行の意義

綠亭生

◎忠孝は古來我國の道德中最も高き地位を占めたものであつて、其内にも孝はすべての德の基とせられ、之を行ふと否とは直ちに人間の品性を批判する標準と見られた位である。そこで余は此孝行の意義が何であるかを考へ、併せてそれが現在及び將來の社會に於ける價値を研究して見たいと思ふ。

◎第一、親が子を愛するとか子が親を愛するとか言ふ事は、自分に最も近きものを愛する事で、これは愛と言ふものが單純の利己より利他に變じた際に起つた初步的の愛である。されば孝行と言ふ事は他愛の最も初步であり最も原始的なもので、僅か一步を退けば本來の利己に立返るものである。それで下等動物から僅か一段進步した野蠻人が先づ愛すべきものは、自分の親か子の外には何もない筈である。則ち孝行と言ふ事は人間自然の本能であつて、我々の道德を單にこれだけに止めて置くならば、左程の修養をも訓誡をも要せぬ譯であるが、更に兄弟を愛し他人を愛し異邦人を愛すると言ふ事になると、我々の道德性は遙かに向上進步せねばならぬ。然るに我國の道德家は往々之を誤解して、孝は一切の德の基であるから人間は孝行さへして居ればそれでよいと思ひ、之を極端に行うて終に排外的の行動に出で、親を愛する爲めに他を害するに及ぶ事がある。

◎古よりよく孝行の引合に出される「鳥の反哺」と言ふ事を考へて見るに、世人は鳥でさへもあれ程孝行であるものをと言ふが、余は彼等が鳥であるから其愛が單に孝行にのみ止まるので、人間ならば親子の間よりも其愛の範圍を更に博くせねばならぬ事と思ふ。元來孝がすべての德の基であると言ふ事は、例へは乳がすべての食の基であると言ふやうなもので、人間の食物がいつまでも乳だけでは濟まぬ如く、我々の道德も孝行にのみ拘泥して居ては不充分で、それよりも進んで博きものに對する愛情を發揮せねばならぬのである。これは啻に余が私見であるのみならず、勅語の中にも父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ恭儉己れを持し博愛衆に及ほしと記されてある。今假りに此文句を父母に孝にと言ふ所で切つて仕まつたならば如何。これ決して完全なる教とは受取られまい。然るに父母に對する道に次いで兄弟夫婦朋友に關する教を垂れ、尚は進み進んで博く衆を愛せよとまで言はれたので意味深長の勅語となつたのである。而して此内に並記されてある種々の德行は、其何れが重きか輕きかと容易に斷定し得べきものではないが、余一己として前の父母兄弟に對する事よりも寧ろ博愛と言ふ點に重きを置くべきものだと思ふ。何故なれば博愛は愛の最も進步したもので、其内には自ら他のすべての愛を含んだものであるから

◎次ぎに孝行と言ふ事の内容は如何なるものかと言ふに、子は親に生んで貰つたから且つ養育を受けたから其恩に報ひねばならぬ、則ち報恩と言ふ事が孝行の一大理由となつて居るらしい又親の力から見ても我子を大きく育てゝ置いて老後を安樂に養はせようと言ふ考へがある。これは貰つたものは必ず返さう、やつたものは乾度取らうと言ふ現金差引主義の勘定であつて、其動機の善惡に係らず時と所により必ずしも行はれるか何うかと言ふが疑問である。則ち古代の社會に於て一般の經濟組織が單純であつた頃は、人間が多く天然の產物に衣食して裕に生活し得られたので、あまり骨を折らずに親を養ふ事が出來たものだ。然るに近世は經濟社會が甚だ複雜になり生存競爭が益々激しくなつて、特別に私有財產でも相續したものでなくば兩親を養ふと言ふ事が甚だ困難になつた。尤も特別の技藝と學問を教えられたものにはそれが容易であるかも知れぬが、親の身にとつて我子に左ほどの教育を施すと言ふ事は大なる負擔であつて今日一人の子に高等の學藝を授くるには其年限と費用の點に於て多大の犧牲を拂はねばならぬ。が、是れ決して多數の父兄が堪え得る所ではない。

◎然るに世間には子女の教育を一箇の企業と心得て居る人が隨分あつて、我子に立派なる教育を施こして置き、行く〳〵は其お蔭を以て左團扇で暮さうと思ふ、則ち我子を一種の賴母子講か貯蓄銀行かの樣に見て、どれ程の學資を拂込んで置けば他日どれ位の月給取が出來ると言ふ勘定をつけるのである、併し此計畫が果して旨く圖に中るかどうかと言へば、十中の八九までは外れるのが常である。何故なれば人間は病氣に罹つて休學する事もあり、又なまけて落第をする事もある、特に青年は種々の誘惑に逢つて放蕩に流れ、中途で廢學する事もあれば死んで仕まふ事さへある、縱しさう言ふ不幸に出遇はずとも今日の教育設備は甚だ不完全なもので、可なり能く出來る學生でも殘酷な選拔試驗で刎出されるもあり、到底初めの豫算は狂ひ勝ちなもので旨く成功する子弟は十中に二三に止まると云つてもよい。斯う言ふ結果を考へると營利事業としての教育は今日多くの父兄が思ふ程有望な事でなく、錢儲けの爲めには子を養ふより寧ろ鷄か豕を飼うた方が多くの利益を得られさうだ。從つて算盤の上から行くと親が子を育てる事と我子に養返して貰ふ事との帳尻は嚴重なる差引勘定が附かぬ事となるのである。

◎これは唯だ親子の間柄のみならず、今はすべて人と人との關係に於て恩を施す事と恩を返す事は昔のやうに容易に行はれ難くなつた。其原因は前にもチョッと述べた通り社會の狀態が大に變化した事、特に其經濟的の方面が著しく複雜になつた爲めで、未開時代の人は今日甲が山に行つて採つて來た菓實を乙に與へて置けば、明日は乙が又同じ樣なものを採つて來て甲に返す。現今でも田舍へ行つて見ると一日餅を搗いて隣りへやつて置けば、次ぎの日は又隣から同じやうな餅を返してくれる。盆正月の贈答品でも彼等は大方貰つたものだけ返禮すると言ふ事になつて居る。然るに近世資本家的の產業が發達して生產のやり方が大に變つて來たので、箇人的に造出した品物を自分の有に歸する事が出來ぬやうになり、稼ぎづめに稼いでも貧乏なものと、遊んで居ても金が儲かるものとの懸隔が益々甚しくなり、一方には一生貰ひつゞけに貰つても足らず、一方には始終施すのみにて尚ほ有餘ると言ふ至極奇妙な世になつて來た。茲に及んでは最早狹き意味の報恩とか現金主義の遣り取りと言ふ事は到底行はれ難く、若し之を行はうとするならば一層廣き範圍に於ける因果應報と言ふ事に考を及ほさねばならぬ事となつた。これを宗教家の立場から見ると人間は皆神佛の子であつて、其生活に必要なものは皆神佛であるから、從つて報恩も亦神佛に對つて之を爲さねばならぬと言ふ。我々の考としても之と大差なく人間の爲すべき勤務と受くべき報酬との計算は、之を卑近なる範圍に於て決定すべきものでなく、更に更に廣き所に目安を置かねばならぬと思ふ。處が今の社會の狀態を見るに均しく神の子たるべき人間の内に甚しき階級を設け互に相競うて畜生にも劣るほどあさましい喰合ひをやつて居るので、之を宗教家の說教にのみ任して置いては到底圓滿に治りさうにないと思ひ、我々は茲に社會と言ふ一箇の有機体を假想して、すべての人間は此有機體を組織する細胞のやうなものであるから、我々は箇人として唯だ其能力に應じたゞけの事を社會に盡せばよし社會は箇人の必要に應じて箇人に與ふればよいと言ふ主義を立て、之によつて今の社會を改革せんとするものである。此主義によれば親が子を育てるのも社會の爲めにする仕事であつて、必ずしも子より其報酬を受くべき筈なく、子も唯だ自分の力で能ふ限り社會の爲めに働き、必ずしも親を養ふ必要がなくなるのである。

◎以上は主として物質的の孝養に就いて述べた話であるが、親子相愛する事は前にも言つた如く動物的の本能であつて、此本能性はすべての人間に於て甚しき差等のなきものであらう。則ち孝といふ心の狀態は誰でも略ぼ同樣なものであらうが、唯之を行爲に現はす點になると時とか金とか言ふやうなものが必要になつて來る。言換ふれば孝行の背景にも經濟と言ふ事情があつて、錢なしには容易に行はれぬ事となつて居る。尤も昔から孝子と言はるゝものは經濟的の境遇や事情に關らず、貧苦のうちに自ら食ふものも食はすして親を養ふたと言ふ話であるが、さう言ふ逆境に處するの道德は寧ろ變態であつて、之を一般の教訓とは爲すべきものでなからう。全体我國の修身教育は數千年前の支那風そのまゝを承繼いだもので、今日でもまだ螢の光り窓の雪を兒童に諭はせ、二十四孝の如き未開時代の道德にも尚ほ大なる權威ありと思ふ先生方が多い樣で、近世物質的の文明が驚くべき進步を遂げた事や、新時代の道德が續々發生しつゝある事に一向お氣がつかぬ樣である。昔の教訓と言ふものは神話や詩的の傳說と混合した所に趣味があるもので、孝子が寒中に筍を掘るとか養老の瀧で酒を汲むなど言ふ事はお伽話として甚だ面白いに違ひない。併し之を二十世紀の社會に當てはめて見たら何うだらう、冬の筍は必ずしも雪の中に求めずとも熱帶地から幾らでも輸入される、又食料店へ行けばそれと殆ど同じ樣な罐詰品も得られる。今日は瀧の水を酒にするよりも狡猾な資本家がそれで電氣を起して工業を營み、莫大の利益を得て酒池肉林の贅澤を極めて居る。さうして又一方には愚直な勞働者が此工場に雇はれ、幾ら稼いでも貧乏で親は愚か自分の口さへ養へぬと言ふので、ストライキをやつて賃金の値上けを迫るとか一揆革命を起さうと言ふ時代に、孝行ばかり昔の型で行かうとは餘り不似合な話ではあるまいか。要するに孝を以て總ての德の基なりとし、之さへ行へばすべての事終れりと考ふる孝行萬能主義は排外自立を事とする野蠻時代の遺風であつて、我國でも鎖國時代の儒者等が之を眞に受けて偏狹な教を布いたのは勢ひ止むを得ぬ事でもあつたが、二十世紀の文明國と自稱する日本の學者や教育家が依然として其轍を履むのは大に恥ずべき事ではないか。それで我々は一日も早く此謬見を改めて、單に親を愛し子を愛するが如く狹い愛の代りに人類同胞と言ふ一層廣き愛情を起こし、孝行と言ふ言葉を不用の死語として僅かに其影を字書の上にのみ殘したい者だと思ふ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

## 二人姉妹

このー篇は去廿六月ユニヴアサリスト教會クリスマスにて演ぜしもの、筋書なり

それがし

灰色の衣著たる婦人の姿にて「行く年」は疲れ衰へて足元あやうく舞に上る、片手には古新聞の一束を重げにかゝへて居る。舞臺中央まで來りて、何か思ひなやむ態。

舊「あゝあ、妾の務も、もうこれで濟んでしまつた、やがて鳴りひゞく十二時の鐘を合圖に、もうこの世界を去らなければなりません。雨が降らうが風が吹かうが一分一秒も休まずに、こゝまで來たは來たけれど、顧みて何の得る處もなく、あゝあ妾はもうこれで永久の眠に入らなければならないのでせうか」

と、深い溜息をもらすと共にがつくりとなりて、腰を下すとそこへ、華やかな服をつけた小女「新年」が、樂しげに來かゝり「行く年」を見ると同時に、なつかしげにそばへ寄る。手には美しい花を盛つた籠をもつてをる。

新「おやお姉さま、なぜまあそのやうに疲れたやうな様子をして居らつしやるの？お姉エさま、あなたは此世界に居らつした間にどんな事がおありになりましたの？」

舊「あゝ、妾はね、これを御覧、妾のした事はみんなこの中に書きつけてありますの、妾はまアこんな記録をこしらふつてどんな苦勞をしたかとお思なさい。それで居て、なんてつまらないでじやう。あなたなんか讀んだつて一寸も面白い事なんかありません。あゝあ、まアこんな物を讀むどころか、あなただつてきつとこれから先身にしみて感じるでせうよ」

から云ひながら尚諦められぬと見えてくりかへし〳〵新聞の束を讀む。

新「お姉エさま、どんな面白い事があつて？」

舊「何の面白い事がありませう。たゞね人間と云ふものが可哀相になるばかり。何とつまらないものでせう。それは〳〵朝から晩まで小さいゝ自分の欲の影ばかり追つかけて居て、少しも妾なんかの通り過ぎるのに氣がつかないのですもの。あんな風にばつかりして居て、おしまひにはどうするのでせう。いつまでも〳〵若い夢に迷うて居て、どうするつもりなんでせう。妾なんかはその間にもせつせ〳〵と自分の旅を急いで一寸の遠慮もしないのに。」

新「それでも、お姉エさま人間だつて少しは賢い者もあるでせう。」

舊「そりや、人間だつてさうみんなにみんな馬鹿ばつかりでもありませんよ、どうかしても妾なんかの過ぎてしまはない間に、なにか立派な記録を妾の、その記録の中に殘して貰はうと思つて、一生懸命になつて働いてる人だつてありますさ」

新「さうでせう、それでこそ、妾うれしいわ、そんな人があればこそ妾だつて來るのに張合があるのですもの。きつとそのやうな人が幸福になる日が來ると思ひますわ」

舊「あア、さうでせうか？妾にはさうばかりも思へないの。嘘なら、あなた自分でこれから先、驗してごらんなさい、きつと、おしまひには厭々してしまうから。そりや人間位わからないものはないのですからね」

新「お姉エさま、あなたはあんまり悲觀なさりすぎますわ。妾だつて何も人間はさう偉いものだとは思ひませんけれども、妾には、神さまから戴いてきたかう云ふものがありますわ、ね、御覧なさい。此籠の中にこんなに美しい花が澤山ありませう。これは「希望」の花と云ふのですよ。それは〳〵薫の好い花なんですの。妾これを世界の人の胸にさしてやります。これさへあれば決して人間はそんなに衰へなんかしませんわ。」

舊「え、希望の花ですつて？まアそんなものが何になりませう、あなたの手にある間はどんなに〳〵美しい希望の花だつてあの怠け者の慾のつよい、おまけに、弱い〳〵人間の胸にさゝれて、あの怖ろしい世の中の雨風に遭つてごらんなさい。直きに萎れて、枯れてしまひますよ」

新「でも、お姉エさま、さうばかりも云へませんわ。今に御覧なさい、妾きつと、あの、可哀相な人間に進歩發展の喜びを與へますから。妾そのためには、一生懸命に力を盡します。」

舊「なるほど、そりや好い決心ですね、その決心さへあるなら、妾、もう何も云ひますまい。ですが、ね、妾だつて、そんな決心は、此世界へ來る始には持つて居ました、けれど―けれど、その決心も今になつては、もう何の甲斐もなくなつてしまひました。この汚れた、分別のない心がけの悪い、そして悪徳の多い、この人間世界に、あなたのその堅い決心も何の役に立ちませう、どんなにあなたが幸福を與へやう〳〵と思つても人間はいつも〳〵不滿足でゐますわ、きつと不平ばかり述べたてゝ居ますわ、妾人間位不平の多い、不滿足の多いものはないと思ひました。一寸見れば、いかにも温かさうでも人間の心の底には冷たい〳〵風が、絶えず吹きすさんで居るのですもの」

新「ですけれど、お姉エさま、あなたがどんなにおつしやつても、妾どうしても、人間を賢こくしやうとつとめます、妾は神様の御心を好く人間に呑み込ませます。そして、ほんとうに人間の人間たる所以を覺らせます。そして、常に心を卑くして、希望の念を起すやうにさせます。それで、もし人間が根から悪でない限りは、きつと妾の居ります間は幸福な月日を送らせます。妾は人間と幸不幸を共にしやうと思ひます」

舊「あゝあ、あなたはまだよく人間を知つてゐないのだ、とにかく妾やあなたは苦勞をして生れた姉妹ですね、人間は幸福〳〵と云ひますけれど、ほんとうの幸福はあの永久無限の國にこそあるのではありませんか。妾たちは一歩〳〵その永久の國へ限りある人間を導いて行くのです。これをまあ、御覧なさい、人間は絶えず泣いたり怨んだりして居るではありませんか。おまけに妾等自身ですが、その永久とやら云ふ所の關際で消えてしまふのです。だが、もう何を云つたつて始まりません。何しろ妾のつとめは濟んだのですから。それではさよなら」

「舊年」はこれで入つてしまふ。丁度その時遠くから鐘の音がきこえて來る。「新年」はうなだれてこの鐘の音をきく。やがて鐘の音は止む。と、「新年」は元氣よく立ち上つて

新「あゝいよ〳〵妾の番だ、お姉エさまはあんなにおつしやつたけれど、妾はきつと人間を幸福にして見せます。あれもう太陽が――初日が出るやうだ」

ト前方を見やる。その時多勢の聲で「新年おめでたう」と云ふのがきこえる。「新年」はさも嬉しさうに笑つて

新「ありがたう、さ、これから、皆さんにこの希望の花をあげますよ」

ト云ひながら、花を手にかざしつゝ入る―幕

## 日本婦人の性格

瀬尾雪波

元來婦人の性格と云ふものは、よく分らない、熱心に婦人を研究し居る人にすら、案外に婦人が理解されて居らぬ、日本婦人の特色は何であるかと言ふことは多年の問題であつて自分には分らぬ、小説家が色々の女性を描くが何れも日本婦人の一部の代表に過ぎぬ、大體日本の婦人は世界的婦人としての價値が充分であらうか之が疑問である、我國民として婦人と聞けば直に家庭と云ふ事を聯想する　安部磯雄氏は日本婦人を高等下婢と曰はれた、高等下婢に相異はない、多數の日本男子は婦人は之で澤山だと曰ふ、然し時代は常に變轉して婦人をして只單に高等下女たるに甘んぜしめぬ、自分は之を愉快であると思ふ、元良博士曰はれるに、我日本婦人の性能の尤も良く發達したものを求むると藝者であると、此言を味つて見て更に泰西諸國の婦人を考へて見ると西洋婦人には日本の藝者めきた所が澤山にある、西洋は一夫一婦であると謳歌する人もある、日本だつて此風習が行はれないことはない、藝者を醜業婦だと曰ふが此醜業婦に學ふべき所が多い、今日の女學生が人の妻となつた時に一家の主婦となつた時に、確かに無形の食物を必要とする、この無形の食物が充分貯えされて居ると否とにて婦人は幸福ともなり悲慘ともなる、自分は只、無形の食物と曰つて深く説明せずに置く、實際に於て眞面目な人人から男女交際論の稱導されたのは奇なる現象である、日本人の神經が鋭敏であるから男女交際にも非常に恐怖の念を抱いて居る者が居る、歌留多會も取締ると云ふ噂が耳に響く、歌留多遊びと曰ふものが室内のツマラヌ遊戲なる故今少し壯大壯快な戸外の世界的遊戲に取り換へると曰つて騷ぐのならばヨク話が分つて居る、自分が今日の教育者に對して不滿なる點はゾーと叫ばずしてゾーノットと叫ぶ所にある、文部省はかくて夏期水泳の練習を取締り、敎會を取締り家庭の中に男席女席を設ける考へらしい、思ふに泰平日久しく續くを以て手持無沙汰の役人連は色々のツマラヌコトを厳重に取締らうと氣を向けて居る、之頗る退嬰的國民、世界的婦人を段縮せしむるものである、余は時勢の進運に活溌なる同化を爲す人種に指を持つ、婦人が段縮して男子が弱くなる、明治以來未だ曾て英雄的婦人の出たのを見たことが無い、偶々之が現はれ出づると世間は冷酷なる迫害を試みる、神經過敏に流れて濫りに常識を口にする連中、乙とか粋とかをふり撒いて通がる文弱者流には英雄的婦人の英姿颯爽たる行動は狂人の行動と見ゆるかも知れぬ、文明が狂的行動を許す能はざれば文明は呪ふべきものである、明治年間の婦人で兎も角も世間を響かしたる婦人は福田女史、下田歌子、矢島揖子、樋口一葉、奧村五百子、鳩山春子、佐々木豐壽、千葉米子、木村曙、花井お梅、野口竹次、千坂光子、竹本綾之助、高橋お傳等の如き少なからざるものである、讀者驚くこと勿れ、中には非難に値する人物もある、しかし人物に完全と名のつけべきものは一人もない、比較的のことに過ぎぬ、以上舉げたる人物は傑物に相違はない、自分の定義では傑物とは腕力の如き者にして人を畏ひつける者であると解釋する、日本歴史に於て創人の注目を促したる婦人は皆日本世界の舞臺に役者たることが出來る、吾人は日本今日の教育を呪ひ、日本の社會組織を呪ひ、進んで突飛、狂喝、奇抜、痛快の英婦的行動を顯揚する、日本婦人に傑物出で、始めて日本男子に英雄が存する、かくて吾人は日本史傳に教へられたる記録を茲に發表す、曰く日本を開きし神は女神の神にして其名を天照大神と名つけ奉ると、日本婦人の性格を論することが以上の如し。


Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 孝行の意義

綠亭生

◎忠孝は古來我國の道德中最も高き地位を占めたものであつて、其内にも孝はすべての德の基とせられ、之を行ふと否とは直ちに人間の品性を批判する標準と見られた位である。そこで余は此孝行の意義が何であるかを考へ、併せてそれが現在及び將來の社會に於ける價値を研究して見たいと思ふ。

◎第一、親が子を愛するとか子が親を愛すると言ふ事は、自分に最も近きものを愛する事で、これは愛と言ふものが單純の利己より利他に變じた際に起つた初步的の愛である。されば孝行と言ふ事は他愛の最も初步であり最も原始的なもので、僅か一步を退けば本來の利己に立返るものである。それで下等動物から僅か一段進步した野蠻人が先づ愛すべきものは、自分の親か子の外には何もない筈である。則ち孝行と言ふ事は人間自然の本能であつて、我々の道德を單にこれだけに止めて置くならば、左程の修養をも訓誡をも要せぬ譯であるが、更に兄弟を愛し他人を愛し異邦人を愛すると言ふ事になると、我々の道德性は遙かに向上進步せねばならぬ。然るに我國の道德家は往々之を誤解して、孝は一切の德の基であるから人間は孝行さへして居ればそれでよいと思ひ、之を極端に行うて終に排外的の行動に出で、親を愛する爲めに他を害するに及ぶ事がある。

◎古よりよく孝行の引合に出される「烏の反哺」と言ふ事を考へて見るに、世人は烏でさへもあれ程孝行であるものをと言ふが、余は彼等が烏であるから其愛が單に孝行にのみ止まるので、人間ならば親子の間よりも其愛の範圍を更に博くせねばならぬ事と思ふ。元來孝がすべての德の基であると言ふ事は、例へは乳がすべての食の基であると言ふやうなもので、人間の食物がいつまでも乳だけでは濟まぬ如く、我々の道德も孝行にのみ拘泥して居ては不充分で、それよりも進んで博きものに對する愛情を發揮せねばならぬのである。これは啻に余が私見であるのみならず、勅語の中にも父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ恭儉己れを持し博愛衆に及ほしと記されてある。今假りに此文句を父母に孝にと言ふ所で切つて仕まつたならば如何、これ決して完全なる敎とは受取られまい。然るに父母に對する道に次いで兄弟婦夫朋友に關する敎を垂れ、尚は進み進んで博く衆を愛せよとまで言はれたので意味深長の勅語となつたのである。而して此内に並記されてある種々の德行は、其何れが重きか輕きかと容易に斷定し得べきものではないが、余一己として前の父母兄弟に對する事よりも寧ろ博愛と言ふ點に重きを置くべきものだと思ふ。何故なれば博愛は愛の最も進步したもので、其内には自ら他のすべての愛を含んだものであるから

◎次ぎに孝行と言ふ事の內容は如何なるものかと言ふに、子は親に生んで貰つたから且つ養育を受けたから其恩に報ひねばならぬ、則ち報恩と言ふ事が孝行の一大理由となつて居るらしい又親の方から見ても我子を大きく育てゝ置いて老後を安樂に養はせようと言ふ考へがある。これは貰つたものは必ず返さう、やつたものは屹度取らうと言ふ現金差引主義の勘定であつて、其動機の善惡に係らず時と所により必ずしも行はれるか何うかと言ふが疑問である。則ち古代の社會に於て一般の經濟組織が單純であつた頃は、人間が多く天然の產物に衣食して裕に生活し得られたので、あまり骨を折らずに親を養ふ事が出來たものだ。然るに近世は經濟社會が甚だ複雜になり生存競爭が益々激しくなつて、特別に私有財產でも相續したものでなくば兩親を養ふと言ふ事が甚た困難になつた。尤も特別の技藝と學問を敎えられたものにはそれが容易であるかも知れぬが、親の身にとつて我子に左ほどの敎育を施すと言ふ事は大なる負擔であつて今日一人の子に高等の學藝を授くるには其年限と費用の點に於て多大の犧牲を拂はねばならぬが、是れ決して多數の父兄が堪え得る所ではない。

◎然るに世間には子女の敎育を一箇の企業と心得て居る人が隨分あつて、我子に立派なる敎育を施こして置き、行く〳〵は其お蔭を以て左團扇で暮さうと思ふ、則ち我子を一種の賴母子講か貯蓄銀行かの樣に見て、これ程の學資を拂込んで置けば他日これ位の月給取が出來ると言ふ勘定をつけるのである、併し此計畫が果して旨く圖に中るかどうかと言へば、十中の八九までは外れるのが常である。何故なれば人間は病氣に罹つて休學する事もあり、又なまけて落第をする事もある、特に靑年は種々の誘惑に逢うて放蕩に流れ、中途で廢學する事もあれば死んで仕まふ事さへある、縱しさう言ふ不幸に出遇はずとも今日の敎育設備は甚だ不完全なもので、可なり能く出來る學生でも殘酷な選拔試驗で刎出されるもあり、到底初めの豫算は狂ひ勝ちなもので旨く成功する子弟は十中に二三に止まると云つてもよい。斯う言ふ結果を考へると營利事業としての敎育は今日多くの父兄が思ふ程有望な事でなく、錢儲けの爲めには子を養ふよりも寧ろ鷄か豕を飼うた方が多くの利益を得られさうだ。從つて算盤の上から行くと親が子を育てる事と我子に養返して貰ふ事との帳尻は嚴重なる差引勘定が附かぬ事となるのである。

◎これは唯だ親子の間柄のみならず、今はすべて人と人との關係に於て恩を施す事と恩を返す事は昔のやうに容易に行はれ難くなつた。其原因は前にもチヨツと述べた通り社會の狀態が大に變化した事、特に其經濟的の方面が著しく複雜になつた爲めで、未開時代の人は今日甲が山に行つて採つて來た菓實を乙に與へて置けば、明日は乙が又同じ樣なものを採つて來て甲に返す。現今でも田舍へ行つて見ると一日餅を搗いて隣りへやつて置けば、次ぎの日は又隣から同じやうな餅を返してくれる。盆正月の贈答品でも彼等は大方貰つたものだけ返禮すると言ふ事になつて居る。然るに近世資本家的の產業が發達して生產のやり方が大に變つて來たので、個人的に造出した品物を自分の有に歸する事が出來ぬやうになり、稼ぎづめに稼いでも貧乏なものと、遊んで居ても金が儲かるものとの懸隔が益々甚しくなり、一方には一生貰ひつゞけに貰つても足らず、一方は始終施すのみにて尚ほ有餘ると言ふ至極奇妙な世になつて來た。茲に及んでは最早狹き意味の報恩とか現金主義の遣り取りと言ふ事は到底行はれ難く、若し之を行はうとするならば一層廣き範圍に於ける因果應報と言ふ事に考を及ぼさねばならぬ事となつた。これを宗敎家の立場から見ると人間は皆神佛の子であつて、其生活に必要なものは皆神佛であるから、從つて報恩も亦神佛に對つて之を爲さねばならぬと言ふ。我々の考でも之と大差なく人間の爲すべき勤務と受くべき報酬との計算は、之を卑近なる範圍に於て決定すべきものでなく、更に更に廣き所に目安を置かねばならぬと思ふ。處が今の社會の狀態を見るに均しく神の子たるべき人間の內に甚しき階級を設け互に相競うて畜生にも劣るほどあさましい喰合ひをやつて居るので、之を宗敎家の說敎にのみ任して置いては到底圓滿に治りさうにないと思ひ、我々は茲に社會と言ふ一箇の有機體を假想して、すべての人間は此有機體を組織する細胞のやうなものであるから、我々は個人として唯だ其能力に應じたゞけの事を社會に盡せばよし社會は個人の必要に應じて個人に與ふればよいと言ふ主義を立て、之によつて今の社會を改革せんとするものである。此主義によれば親が子を育てるのも社會の爲めにする仕事であつて、必ずしも子より其報酬を受くべき筈なく、子も唯だ自分の力で能ふ限り社會の爲めに働き、必ずしも親を養ふ必要がなくなるのである。

◎以上は主として物質的の孝養に就いて述べた話であるが、親子相愛する事は前にも言つた如く動物的の本能であつて、此本能性はすべての人間に於て甚しき差等のなきものであらう。則ち孝と言ふ心の狀態は誰でも略ぼ同樣なものであらうが、唯之を行爲に現はす點になると時とか金とか言ふやうなものが必要になつて來る。言換ふれば孝行の背景にも經濟と言ふ事情があつて、錢なしには容易に行はれぬ事となつて居る。尤も昔から孝子と言はるゝものは經濟的の境遇や事情に關らず、貧苦のうちに自ら食ふものも食はずして親を養ふたと言ふ話であるが、さう言ふ逆境に處するの道德は寧ろ變態であつて、之を一般の敎訓とは爲すべきものでなからう。全体我國の修身敎育は數千年前の支那風そのまゝを承繼いだもので、今日でもまだ螢の光り窓の雪を兒童に諳はせ、二十四孝の如き未開時代の道德にも尙は大なる權威ありと思ふ先生方が多い樣で、近世物質的の文明が驚くべき進步を遂げた事や、新時代の道德が續々發生しつゝある事に一向お氣がつかぬ樣である。昔の敎訓と言ふものは神話や詩的の傳說と混合した所に趣味があるもので、孝子が寒中に筍を掘るとか養老の瀧で酒を汲むなど言ふ事はお伽話として甚だ面白いに違ひない。併し之を二十世紀の社會に當てはめて見たら何うだらう、冬の筍は必ずしも雪の中に求めずとも熱帶地から幾らでも輸入される、又食料店へ行けばそれと殆ど同じ樣な罐詰品も得られる。今日は瀧の水を酒にするよりも狡猾な資本家がそれで電氣を起して工業を營み、莫大の利益を得て酒池肉林の贅澤を極めて居る。さうして又一方には愚直な勞働者が此工場に雇はれ、幾ら稼いでも貧乏で親は愚か自分の口さへ養へぬと言ふので、ストライキをやつて賃金の値上けを迫るとか一揆革命を起さうと言ふ時代に、孝行ばかり昔の型で行かうとは餘り不似合な話ではあるまいか。要するに孝を以て總ての德の基なりとし、之さへ行へばすべての事終れりと考ふる孝行萬能主義は排外自立を事とする野蠻時代の遺風であつて、我國でも鎖國時代の儒者等が之を眞に受けて偏狹な敎を布いたのは勢ひ止むを得ぬ事でもあつたが、二十世紀の文明國と自稱する日本の學者や敎育家が依然として其轍を履むのは大に恥ずべき事ではないか。それで我々は一日も早く此謬見を改めて、單に親を愛し子を愛するが如く狹い愛の代りに人類同胞と言ふ一層廣き愛情を起こし、孝行と言ふ言葉を不用の死語として僅かに其影を字書の上にのみ殘したい者だと思ふ。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

## 二人姉妹

（この一篇は去廿六月ユニヴァサリスト教會クリスマスにて演ぜしもの、譯者なり）

それがし

灰色の衣着たる婦人の姿にて「行く年」は疲れ衰へて足元あやうく壇に上る、片手には古新聞の一束を重げにかゝへて居る。

舞臺中央まで來りて、何か思ひなやむ態。

舊「あゝあ、妾の務も、もうこれで濟んでしまつた、やがて鳴りひゞく十二時の鐘を合圖に、もうこの世界を去らなければなりません。雨が降らうが風が吹かうが一分一秒も休まずに、ここまで來たは來たけれど、顧みて何の得る處もなく、あゝあ妾はもうこれで永久の眠に入らなければならないのでせうか」

と、深い溜息をもらすと共にがつくりとなりて、腰を下すとそこへ、華やかな服をつけた小女「新年」が、樂しげに來かゝり「行く年」を見ると同時に、なつかしげにそばへ寄る。手には美しい花を盛つた籠をもつてをる。

新「おやお姉さま、なぜまあそのやうに疲れたやうな樣子をして居らつしやるの？お姉エさま、あなたは此世界に居らつした間にどんな事がおありになりましたの？」

舊「あゝ、妾はね、これを御覽、妾のした事はみんなこの中に書きつけてありますの、妾はまアこんな記錄をこしらふつてどんな苦勞をしたかとお思なさい。それで居て、なんてつまらないでじやう。あなたなんか讀んだつて一寸も面白い事なんかありません。あゝあ、まアこんな物を讀むどころか、あなたゞつてきつとこれから先身にしみて感じるでせうよ」

かう云ひながら倚諦められぬと見えてくりかへし〳〵新聞の束を讀む。

新「お姉エさま、どんな面白い事があつて？」

舊「何の面白い事がありませう。たゞね人間と云ふものが可哀相になるばかり。何とつまらないものでせう。それは〳〵朝から晩まで小さい〳〵自分の欲の影ばかり追つかけて居て、少しも妾なんかの通り過ぎるのに氣がつかないのですもの。あんな風にばつかりして居て、おしまひには如何するのでせう。いつまでも〳〵若い夢に迷うて居て、どうするつもりなんでせう。妾なんかはその間にもせつせ〳〵と自分の旅を急いで一寸の遠慮もしないのに。」

新「それでも、お姉エさま人間だつて少しは賢い者もあるでせう。」

舊「そりや、人間だつてさうみんなにみんな馬鹿ばつかりでもありませんよ、どうかしても妾なんかの過ぎてしまはない間に、なにか立派な記錄を妾の、その記錄の中に殘して貰はうと思つて、一生懸命になつて働いてる人だつてありますさ」

新「さうでせう、それでこそ、妾うれしいわ、そんな人があればこそ妾だつて來るのに張合があるのですもの。きつとそのやうな人が幸福になる日が來ると思ひますわ」

舊「あア、さうでせうか？妾にはさうばかりも思へないの。噓なら、あなた自分でこれから先、驗してごらんなさい、きつと、おしまひには厭々してしまうから。そりや人間位わからないものはないのですからね」

新「お姉エさま、あなたはあんまり悲觀なさりすぎますわ。妾だつて何も人間はさう偉いものだとは思ひませんけれども、妾には、神さまから戴いてきたかう云ふものがありますわ、ね、御覽なさい。此籠の中にこんなに美しい花が澤山ありませう。これは「希望」の花と云ふのですよ。それは〳〵顏の好い花なんですの。妾これを世界の人の胸にさしてやります。これさへあれば決して人間はそんなに衰へなんかしませんわ。」

舊「え、希望の花ですつて？まアそんなものが何になりませう、あなたの手にある間はどんなに〳〵美しい希望の花だつてあの怠け者の慾のつよい、おまけに、弱い〳〵人間の胸にさゝれて、あの怖ろしい世の中の雨風に遭つてごらんなさい。直きに萎れて、枯れてしまひますよ」

新「でも、お姉エさま、さうばかりも云へませんわ。今に御覽なさい、妾きつと、あの、可哀相な人間に進步發展の喜びを與へますから。妾そのためには、一生懸命に力を盡します。」

舊「なるほど、そりや好い決心ですね、その決心さへあるなら、妾、もう何も云ひますまい。ですが、ね、妾だつて、そんな決心は、此世界へ來る始には持つて居ました、けれど—けれど、その決心も今になつては、もう何の甲斐もなくなつてしまひました。この汚れた、分別のない心がけの惡い、そして惡德の多い、この人間世界に、あなたのその堅い決心も何の役に立ちませう、どんなにあなたが幸福々々與へやう〳〵と思つても人間はいつも〳〵不滿足でゐますわ、きつと不平ばかり述べたてゝ居ますわ、妾人間位不平の多い、不滿足の多いものはないと思ひました。一寸見れば、いかにも溫かさうでも人間の心の底には冷たい〳〵風が、絕えず吹きすさんで居るのですもの」

新「ですけれど、お姉エさま、あなたがどんなにおつしやつても、妾どうしても、人間を賢こくしやうとつとめます、妾は神樣の御心を好く人間に吞み込ませます。そして、ほんとうに人間の人間たる所以を覺らせます。そして、常に心を卑くして、希望の念を起すやうにさせます。それで、もし人間が根から愚でない限りは、きつと妾の居ります間は幸福な月日を送らせます妾は人間と幸不幸を共にしやうと思ひます」

舊「あゝあ、あなたはまだよく人間を知つてゐないのだ、とにかく妾やあなたは苦勞をして生れた姉妹ですね、人間は幸福〳〵と云ひますけれどほんとうの幸福はあの永久無限の國にこそあるのではありませんか。妾たちは一步〳〵その永久の國へ限りある人間を導いて行くのです。これをまあ、御覽なさい、人間は絕えず泣いたり怨んだりして居るではありませんか。おまけに妾等自身ですが、その永久とやら云ふ所の間際で消えてしまふのです。だが、もう何を云つたつて始まりません。何しろ妾のつとめは濟んだのですから。それではさよなら」

「舊年」はこれで入つてしまふ。丁度その時遠くから鐘の音がきこえて來る。

「新年」はうなだれてこの鐘の音をきく。やがて鐘の音は止む。と、「新年」は元氣よく立ち上つて

新「あ、いよ〳〵妾の番だ、お姉エさまはあんなにおつしやつたけれど、妾はきつと人間を幸福にして見せます。あれもう太陽が——初日が出るやうだ」

ト前方を見やる。その時多勢の聲で「新年おめでたう」と云ふのがきこえる。「新年」はさも嬉しさうに笑つて

新「ありがたう、さ、これから、皆さんにこの希望の花をあげますよ」

ト云ひながら、花を手にかざしつゝ入る—（幕）

## 日本婦人の性格

瀨尾雪波

元來婦人の性格と云ふものは、よく分らない、熱心に婦人を硏究し居る人にすら、案外に婦人が理解されて居らぬ、日本婦人の特色は何であるかと云ふことは多年の宿題であつて自分には分らぬ、小說家が色々の女性を描くが何れも日本婦人の一部の代表に過ぎぬ、大體日本の婦人は世界的婦人としての價値が充分であらうか之が疑問である、我國民として婦人と聞けば直に家庭と云ふ事を聯想する　安部磯雄氏は日本婦人を高等下婢と曰はれた、高等下婢に相異はない、多數の日本男子は婦人は之で澤山だと曰ふ、然し時代は常に變轉して婦人をして只單に高等下女たるに甘んぜしめぬ、自分は之を愉快であると思ふ、元良博士曰はれるに、我日本婦人の性能の尤も良く發達したものを求むると藝者である、此語を味つて見て更に泰西諸國の婦人を考へて見ると西洋婦人には日本の藝者めきた所が澤山にある、西洋は一夫一婦であると謳歌する人もある、日本だつて此風習が行はれないことはない、藝者を醜業婦だと曰ふが此醜業婦に習ふべき所が多い、今日の女學生が人の妻となつた時に一家の主婦となつた時に、確かに無形の食物を必要とする、この無形の食物が充分斷されて居ると否とにて婦人は幸福ともなり悲慘ともなる、自分は只、無形の食物と曰つて深く說明せずに置く、實際に於て眞面目な人人から男女交際論の稱導されたのは奇なる現象である、日本人の神經が鋭敏であるから男女交際にも非常に恐怖の念を抱いて居る者が居る、歌留多會も取締ると云ふ噂が耳に響く、歌留多遊びと曰ふものが室内のツマラヌ遊戲なる故今少し婦人壯快な戸外の世界的遊戲に取り換へると曰つて騷ぐのならばヨク話が分つて居る、自分が今日の教育者に對して不滿なる點はソーと叫ばずしてゾーノツトと叫ぶ所にある、文部省はかくて夏期水泳の練習を取締り、教育を取締り、電車の中に男女別席を設ける考へらしい、思ふに泰平日久しく續くを以て手持無沙汰の役人連は色々のツマラヌコトを嚴重に取締らうと氣を向けて居る、斯る壓服的國民、世界的婦人を畏縮せしむるものである、余は時勢の進運に活潑なる同化を爲す人種に耳を持つ、婦人が畏縮して男子が弱くなる、明治以來未だ眞の貞婦的婦人の出たのを見たことが無い、偶々之が現はれ出づると世間は冷酷なる迫害を試みる、神經過敏に流れて濫りに常識を口にする連中、乙とか粹とかをふり撒いて通がる文弱者流には藝妓的婦人の放恣遊興たる行動は狂人の行動と見ゆるかも知れぬ、文明が狂的行動を爲す能はざれば文明は呪ふべきものである、明治年間の婦人で毛も角も世間を驚かしたる人人は楠田女史、下田歌子、矢島揖子、若松賤子、樋口一葉、奥村五百子、鳩山春子、佐々木豐壽、千歳米坡、本庄幽蘭、花井お梅、野口竹世、下坂光子、竹本京子、竹本綾之助、高橋お傳等少なき者である、讀者驚くこと勿れ、此中には非難に値する人物もある、しかし人物に完全と名のつけべきものは一人もない比較的のことに過ぎぬ、自分の擧したる人物は傑物に相違はない、自分の定義では傑物とは磁力の如き者にして人を吸ひつける者であると解釋する、日本國内に於て人の耳目を聳したる婦人は斷じて世界の新婦人たることが出來る、吾人は日本今日の教育を呪ひ、日本の新舊組織を呪ひ、進んで突飛、狂闊、奇拔、痛快の婦人的行動を頌揚する、日本婦人に傑物出でゝ日本男子に英雄が輩出する、かくて吾人は日本歷史傳に數へられたる記憶を茲に發表す、曰く日本を開きし神は女性の神にして其名を天照大神と名つけ奉る、日本婦人の性格を論ずることは以上の如し。

## 公憤を救へ

相良崇陽

御官員樣は無暗矢鱈に尊くて、農商の輩は無下に卑しいものであるといふ所謂官尊民卑の舊思想は、眞の結氷が旭に溶くるやうに消え行くのは、近來快心の事であるが、さいへ、かゝる明かなる御代に尚、極めて奇怪至極なる謬見を有するものがある、迷想に驅られてゐるものがある。それは何であらうか、世人が新平民に對する感想である、所行である。吾人は左に記す事實を實見して、今更のやうに世の暗黒なるに驚いたのである、憤つたのである。而して飾らざる自然の兒、而も虐げらるゝ新平民を救はねばならぬと思ふのである。

係累多き予は、家事を整ふべく暫時故郷（鹿兒島縣薩摩郡上東郷村）の人とならねばならぬことになつた。そうして其間約間一切のことは措いて、他意なく其事に當つてゐたのであつたが、徒然を慰むる地方新聞紙上に我縣中等教育界の腐敗てう醜が散見するを認めた。續いて教育界の刷新などの叫びを聞た。かくて事實は視學官の退職となり、某々中學校長等の休職となり、三四縣當局者の罷免となり、其餘波は及んで、縣下小學校教員の大陶汰が行はれたのである。職を失ふて苦しむ人、位置を高めて喜ぶ先生、望まぬ教師を得てつぶやく學校、良教師を迎えて嬉しがる村民、など樣々の象を表はしたが、何れも暫しのさゝやきに止まつて後は間もなく、平穩なる舊態に歸つたのであつたか。かゝるさはぎにもれず我村も校長は轉任する主席訓導の其他に多少の異動が有つた、中にて村民が尤も有難つて迎えたのは、從來隣村に校長として名聲高かつた藤波小一君が我校の主席訓導として就任したことで有る。聞けば藤波君は四年前の師範校出身で在學中は成績優等で、品性は若手には稀な高傑な君子人で、同輩の崇敬を受くると共に、先輩教師の目に止まる處となつて、普通にはあり得ない破格な昇進で、早く校長の椅子を占めることになつたとやら、然るに向上の念に富み修養怠らぬ同君は、教師交迭の事あるを機として、比較的規模の大なる我村の學校に其地位を落して主席訓導として來任されたのであつた。かゝる閲歴を有する理想に近い良教師を得た我村民の喜びは一通りではなかつたので、盛なる歡迎會は催され、又、氏を頌するの辭を聴く毎に、予はかげながら私に氏の性格を想見し、同時にかゝる教師を得し我學校の幸福を祝ふたので有つた。

徳は自然に及んで、藤波先生は良い先生であるといふ聲が校の内外にきこえ出したのは、氏が就職後いまだ久しからぬうちであつた。然るに如何しけんかかる美しき氏の身上に容易ならざる汚點を印せんとする事件が起つた。外でもない、予が半地を中心として附近部落の有志者が會合を催して、かく迄信頼せし藤波先生を排斥する企てをなした事である。書加へる予が、郷里に於ては一種の組合がある。郷黨に關する問題が起れば、そを解決せんが爲めに各家長等が會合して審議討論するのである。村會の小なるものといふべくして、しかく規則的でない、不秩序である、形式的でなくて精神的である。不整頓ではあるが、そのかはり極めて眞摯である眞面目である。直接の關係が有るところからして其た熱心である。善にも悪にも働けば其れに向つて邁進し停止する處を知らずといふ有樣で、かゝる團體の存在に伴ふて幾多の利益を生み出した實例が有ると共に、又同樣に悪結果を來した事も少くないのである。さてこの組合よりして會合のお觸れに接して實父は參會したのである。更たけて歸つて來たが、藤波訓導は「穢多」だといふので放逐せねばならぬといふ協議會であつたが、明晩再び會合する約束であつたとのこと、予は此の話しをきいて何となく奇異の想をなしたのみで特に深い感念は起さなかつた。かくて翌日は暮れて夕刻となつた。實父は多用のため出會されないので、予に代理を命じた、定刻に會場に往つて見ると三四會員が集つてゐる。何れも顔知合の人々である。やがて漸次に集つて來る協議員、其多くは徳川時代の遺物老輩中には予と同じく代理を仰付かつた青年も見えてゐた。もとより議長や座長があるではなく席次の次第もなければしかつめらし結構もないかゝる混合の中に誰れいふとなく話題は轉じて本問題なる藤波先生排斥に移つて、甲も乙も、遠慮なく罵倒し盡すは、藤波は穢多である…新平民を穢多といふ…穢多を我村に留め置くことは相成らぬ、穢多より示導さるゝ子弟の恥辱父兄の不面目此上はない、須らく放逐せねばならぬといふので、其勢ひの烈しいこと、罵り呪ふ聲は四隣に洩れてすさまじい。理性を失ふてゐる彼等は、只、「穢多」なる一語に激して感情の狂亂を示してゐたのである。予は出會の以前よりして問題の性質は承知してゐたものゝ、かく迄のことではあるまいと思ふてゐたのであつた。然るに彼等が罵る聲のあまりに鬼々しく惡魔の叫びのやうに聞ゆるので漸次につりこまれておのづと本氣になつたのである。そうして從來蓋はれてゐる自由平等の思想は、はしなくも此所に著しくあらはれ出でて、どうしても他人事と聞捨てにせられなくなつて來た。常には郷黨先輩を畏敬して部績の徳を保たねばならぬと保守してゐる予も、ほとんど默してゐられなくなつて來た。穢多なればとて何故にかく蔑視せられねばならぬのであらうか、新平民は何故に放逐せねばならぬのであらうか、昨日までは理想の教師を得たと喜んだ連中が、掌を返すやうな今日の始末、それも藤波君の惡徳を惡んでといふならばとにかく、理由もなにもない、只、「穢多」だ「新平民」であるといふまでのことである。穢多！新平民！從來の習慣性によれば何となく愉快ではあるまい、憎くもあらう。されどかくまで罵らぬでもよからう、罪のない人をかく詛呪はぬでもよからう、嘲けぬでもよからう、余りに不同情千萬である、不合理極まる話である、と考え來れば、一面識なしと雖、俠氣の血の感を起さずにはいられない、否公憤をもらさずにはゐられない。かくて予は堪えず口を切つたのである「新平民も同じ人間である久しく蔑賤められ來つた憫な階級の人々である、弱き者は助けねばならぬ、虐くべきものではない、理屈からいふても新平民を惡むべき理由はない、聞けば同君は良教師であるといふではないか、かゝる良師を單に穢多なりといふのみを以て放逐せんとするは實に不合理極まることである、迫害慘虐の極である。道を知らず情を辨えざる仕方である。同氏を放逐するは人道の上許し難き罪惡であると共に又我村の不幸を招くやうなことである。であるから少し心を静めて思ひなほして貰はねばならぬ」といふ意味で、極めて平温に、おとなしく、なるべく彼等の感情を害はぬやうにとつとめて以上の話を試みたので有つた。ところが別に進み出でゝ予を反駁する人はなかつたが、かく迄一致協談しつゝある中に、毛色の異つた予が飛出したのであるから、一同は極めて不快の相貌を現はして、ここにもかしこにもつぶやきが起つた。穢多ではないか。新平民である、穢多に敬はるといふことが有るか、穢多だ穢多だといふ調子で中々に彼等の心情は和ぎそうでないのみならず、何と理屈をいふても穢多は御免だ新平だ、御免〳〵の一點張、彼等の心を飜すは不可能である、熱しきつてゐる彼等の頭には今更予の說法も役に立たないのである。辯明すればするほど反對に彼等の心は激し彼等の憤は增するのである、と認めた予は長居は無用と諦めた。そうして予は切角の御相談なれど實父を代表した予は御說に賛同することは出來ない旨を述べて席を起つた。歸途予は考へた、定めて彼等は予を憎んだであらう、恨んだであらう、されど予は恥しいことはないと、歸つて父にも報告した。父は何とも語らなかつたが面には明かに。予が此の反對說にあきたらず思ふたことを呈した。やがて予は寢床についた、そうして色々と考えて見た、思へば思ふ程如何にも同君が可愛想でたまらない、今の儘にしておくことんな無理を強ひらるゝかも知れない、これはどうしても捨置くべきことではない、どうかして氏を安然ならしめ、彼等をして少しなりと人道の怨せにすべきものならざるを知らしめねばならぬと眞面目に考え出された、そうして其任に當るは將に予が責任であるやうに感ぜられて來るので、予の心は一轉一轉深入りするやうになつて來た。さて考て見た、今夜の模樣では到底彼等の運動は止むべきではない、いや益其度を加ふるのである、野猪の狂ふたやうに理非の分別なしに猛進決行するのは、彼等の本質である迚も手はつけられぬ、困つたものであるやうに悲觀する間には、又、いや、かかる單純な人々の心情は往々にして或動機の下に變化せぬとも限らない、では何とか方法が無いではあるまいと考えに考えた結果、成否はとにかく一種の考へを思ひ出した、といふのは、彼等は同君を放逐しやうとは呼ぶものゝ、如何にして逐ひ出し得るかといふ手段は少しも考えていないやうであることは、實に乘ずべき機であると妙案を得たやうに心うれしく、やがて明くるを待つて、直ちに郡衙に出頭して視學と掛りの書記に事のなりゆきを詳かに告げて、教育家の威信を保つ上からも、特に人道といふ點に就て慎重なる取扱ひをして貰はねばならぬと相談して歸つた。この事如何にして彼等の耳に達したのか予が當局者と謀つたといふことを知つた時、彼等の激怒は極點に達したのであつたが、同時に彼等に取つては少からぬ打撃となつたのである。役吏が予と腹を合せた以上は迚も彼等の志は遂せらるまいといふので恰も行く先きを塞がれたやうに、うろたえたのである。されど放たれたる矢は何處にか落ちねばならぬ、彼等がうらみの鋒は直ちに予に向つて振はるゝこととなつた。我等の進行を害するは予である、なまかぢりの學問を鼻に掛けて生意氣な、我々を無視して穢多の肩をもつとは何と不届至極不埒千萬、けしからぬ奴である憎むべき奴であるといふやうに、當の敵は見逃して、間に立つた予を憎むことになつて來た。而して三日を過ぎた後の夜例の會中からして出席を促した。樣子は察せられたものゝ出席せぬは何となく卑怯なやうな感がするので誘はるゝまゝに出て行つた。席に列する面々何れも、腹に据え兼ねた怒情を兩眼にむき出して

Digitized by Google



Original from CORNELL UNIVERSITY

の權幕、予は完く敵中に捕はれたやうに感ぜられたが、かくなればおかしくおちつく度胸、平然と挨拶を述ぶるに返しもやらず、まつかうよりあびせかけられたは罵詈の語斷、貴樣は役所なぞに往ていらざる訴えをしたそうだ」、人もなげなる言振、グッと癪にさはつたが、殊更に冷靜を裝ふて有りの儘に辯解すると、却つてのが彼等の怒を益すのである。予が辯論の漸やく進むにつれて、勢ひ何となく險惡に窺はれてたがごはなしに予が周圍を取卷いた、益々、彼等の罵る者、騷ぐもで漸やくに膝をのり出して何時腸は煮えかへつたと見えてはや理性の力は失つたのであらう。情に驅らるゝまゝ、固められし拳骨は遠慮なく予の頭上に落ちかかつた。打たれては予もそれまで、前後を考慮する暇は更に無い、全く夢中である、喧嘩となつた。暫しが程爭ふたが予は終に右臂を傷けられたまゝ打たれ打たれて歸らざるを得なかつた。歸りついて考えてみると、如何にも悔しい、情けないやうで殘念な氣がする、馬鹿らしくもあるといふやうに色々な感慨がむらがり來る。とつおいつ思考の末は、どうしても自分のなす處は正義である、やましくない、何處までもやらねばならぬといふ自覺に伴ふて、打たれたといふ悲憤の情が加はつて、どうしても止す譯に行かぬ。益々決心を固めて、續行るまでやると斷案を下したが、さて、靜かに考えて見ると、只一人こんなに力んでみても肝心な瀬波君が臆病く逃出してはそれまでだ、では是非とも同君を確め置かねばならないと考え及んで、翌る日の午後同君を訪ふた。初めて面會したのである、初對面であつた、直ちに來意を告げた。同君はいたく氣の毒さうに又、しか挨拶して「私もかたく覺悟致しました、やみ〳〵踏みつぶされはいたしますまひ」と心からの誓ひである。予は此の言に力を得て「それでは互ひにやりませう」と約して歸つた。

だれから聽いたのか、實父が右の騷ぎをきいてはたとひ予の所行に同情せぬとしても、我子が打たれたときいては昔氣質の實父默つてはゐない、予よりも一層激しく怒つて其罪を問はずにはやまぬと憤る。多少の位置と勢力を有する父が此の態度は再び彼等に取つても打擊となる當局の意嚮に憂ひ、父の怒に觸れた彼等、さらぬだにおのが、亂行の餘りに暴なりしを悔い、かつ、知識ある輩は情に於て忍びずとするも、理に於て正しからざるをさとりては頑強に我を通すことの疚しかりけん、以前の猛りに狂ひし放逐の熱は幾分か冷えたと覺えて、重ねてやかましい會合も催さなかつた。勿論理を悟り情を正して義についたといふのではないけれども、幾分か火の手を和げたことは事實である、かくして予が國を出る八月迄は依然として氏は其位置を保つてゐられたが、今に尚在職中とのことである。

以上は予が滯鄕中の實驗談である。嘗て予は新平民に對する同情を以て多少の研究をなしたることもある。されど有體に言へば當時予は彼等に同情しつゝ尚故なくして輕侮の念を挿ふたこともあつた。然るに此事ありてよりは、たしかに輕蔑の念は消えて眞に同情の心のみまさるのである。予は新平民に就て論じたい多くの思想を貯へてゐるつもりである。されど練らざる我等の思想を發表するは禮を失ふことの次第であるやうに思はれて、控へねばならぬかと暫し筆を擱く。されど世の眞の淑女紳士等よ、もし我同胞の間に在りて、最も虐待せられ輕視せられ、恰も禽獸視せらるゝ、憐むべき新平民なる一階級ありと思召さば、何とかして彼等を救濟し、少くとも我等と等しく天日に浴せしめ給へよ。是れ予が願なり祈也。

## △福田英謹んで申す

今年も昨年と同じく治安警察法第五條の改正を衆議院に向つて提出致しますが、本年は私が高齢の實母を自宅で看護しなくてはなりませぬので、充分の運動は出來ません、併し同志の今井歌子女史は疾に議員諸氏を訪問されて、不相變活動されて居りますから、同姉に御委任致したいと思ひます、世界婦人の愛讀者諸姉は既に御存知の事ゆへ至急御調印の上願書御送附を願ひます、尚旅行記も來月は掲載致します、二十年ぶりにて懷舊を語り語られし、先還津下部子女史の昇傳の御披露も致しければと

## ○小說　不義の子

西川さつき子

『お母さんを失つて、落膽したでしやう」

『本當に私モー淋しくて、心細いやら頼りないやら」

『僕はどんなに貴孃が弱つてるかと思つて可愛相で慰めてあげたくて堪らなかつたです」

『それに母の今際の時に容易ならぬ事を聞かされましたので」

『どんなと？、容易ならぬ事ッて」

『まあお驚きなさいますわ」

『どんなと聞かして下さい、稲さん」

日比谷公園電燈の火影鮮かなる芝山に、二つの影を地上に印して、上りゆく男女は、師走の夜風ひし〳〵と身に沁みて肌寒さに話聲さへあやしくふるえを帶ひた。

稲さんと云はれた女は、

『母の秘密ですから決してね……」と後は目で他言を制して『あのベンチに掛けましやう」と二人は上りつめた吾妻屋のベンチに身を寄せた

『何？稲さん驚くッて！」

暫し躊躇た稲さんは急に思ひ切つた樣に

『私の本當の父は中川先生ですと」

『え！」男は自分の聞き誤りでなきかと顚狂に問ひかへした

『今私ともの世話になつてゐます、あの中川先生が私の父で」

『え、では僕の伯父が、一體どうしたと云ふんです」

『母が師範校を卒業して、小石川の學校に務めてゐました頃、中川先生も同じ學校にゐらつして相容す交情となりましたが、母には既に約婚がありましてそれを斷る勇氣はなく、又中川さんは中々の想はれ人で女に對しての御注文は難かしい方なものですから、とても末々まで責任を果して下さるとは思はれなかつたので母はとう〳〵思ひ切つて國に歸り結婚いたしました相です、それが明治二十年の三月で私はその十月産れましたので生い育ち難い八月子として大變勞はられた相です、それで母は苦悶の中にも、私を強て父の子と思ひ偽して、一方中川先生を忘れるとに務め、一方其重い父といふ責任を負つて下すつた父に、内心非常な感謝と謝罪をして陰ながら詫びたと申しました、然し實の父にも見せたいと云ふ女の弱い心から中川先生にお世話を願つたのです、母は私には話さないで終うと思つたが、この頃中川さんからの便りで、稲さんと一郎と親しいといふ事を聞いて、男女の交は親しくなれば得てそうなり易ひからそんなとがあつては大變だと心配の余り話したのでと」

『なぜ大變です？では僕と稲さんとは從兄妹同志ぢやありませんか、稲さんが僕の伯父の實子であれば」

『處がまだ〳〵大變なとがあるのですよ」

『え！まだ大變なと、どんな」

『貴兄も中川さんの實子ですと」

『何、僕が」

『はい」

『本當、稲さん」

『許して下さい兄さん、兄妹ですわ」

稲さんは一郎の膝によゝと泣き入つた、

『だつて僕には立派に通といふ父があるじやありませんか、稲さんの聞違いか、お母さんの思違でしやう」

『いゝえ通樣が貴兄の本當の伯父樣ですよ」

『どうして」

稲さんは涙を拂つて又語り出した

『中川さんは氣の優しい小心な方でクリスチヤンで男女の關係はおやかましく罪惡だなどゝ仰つしやて嚴格な方でしたが妙に女に思はるゝ方で、母と關係のあつた以前に、亞米利加に行つた親友の妻君に世話になつてゐらつした時、其妻君が大變可愛がりまして、妙な事になつてとう〳〵貴兄が出來まして、中川さんはまだ學生時代でしたので、お兄さんの子にしてお國で育てなさつたのだ相です」

『ぢや僕は父も母も違ふんで」

『はいそれで其女の力は亞米利加の夫にも顔台されず、中川さんも氣が弱くて妻になさる丈の決心もなく、一時の過失としておしまひなされたので、非常に悄落して了ひなさつて氣の毒だと中川さんが母に懺悔なされたので、母も中川さんの無責任を能知りながらやはりある引力に引つけられてそんな事になりましたが、母は貴兄のお母さんの二の舞をするのが恐ろしさに包みきれぬ罪惡をおはふて父に走つたのです」

『では僕は姦通の子、貴女も不義の子で兄妹ですね」

『まあどういたしませやう」稲子は思切つて一郎の手を握りしめた、

半月高く愛宕山の木の間に沒してきらめく星影珠の如く物凄きまでさえゆく冬の夜の更くるにつれて、邊りは森閑として人なきに、歸途を急ぐ堀側の電車のみゴヴ〳〵と響を殘して寂寞なり、

『稲さんこんな汚れたとを聞かない中に、知らない中にうつくしい相思の人として消えて了いたかつたね」一郎も絕望と惡感と無念交々の感慨に破裂くるばかりの胸を押へた

『では猶汚れを深からしめるばかりで、少しも雪がれはいたしませんわ」

『これが普通の親友で、正しい兄妹のあつたと聞けば喜ばずに居られんが、あまり想ひ合つた丈、大事なものを奪はれた樣に恨めしく、又そうした兄妹であると聞いては口惜しくて堪らない」と一郎は遺憾なさに下唇をかみしめた、

『私も泣きもし悶えもいたしましたがよく考へて見れば、母にも中川さんにも貴兄のお母さんにだつて同情せねばならぬ氣の毒なともあります、最初に愛のない結婚を強いられて、不知の間に愛情の不足を感じてゐたからで御座いましやう、中川先生だつて地位財産のなかつた爲に初戀の方をも取られなさつたのでモー死灰の樣になつてゐながら、矢張人間ですから誘惑にあへばそんなとにもなりましやう、そして誰にも義理が惡いからといつてあゝして無妻でお過しなさつたのですもの罪は許さねばなりませんわ、しかし貴兄のお母さんといひ、母と云ひ満腔の愛情を捧げたい人を目のあたり見ながら出來なかつた悲劇は如何でしやう、私は人の愛情はどこまでも自由に出來うる樣な社會に、いたしたいと決心いたしました、舊道德舊思想に支配された人の感情、世の形式、習慣は破らねばなりませぬ」、稲子は凛とした口を結んで、玉の如き涙に眸をかゞやかした、そしてお堀のかなた石垣に垂れかゝつた松が枝を打眺んで、高貴な力にも自由なき束縛になげかるゝ事は多いのでしやう」と嘆息した、

一郎も感慨無量の長嘆息をついて

『さうだ戀愛の自由をさけばねばならぬ、稲さん共に親々の不過に深き同情の熱涙をそゝいで勵まうね」

夜更けて身を切るばかりの寒風は容捨もなく二人の間をスウッと吹き切つた、同時に二人は石の樣に突立つた。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 農家と理料(七)(續)

増田操

苧麻は一に辣芙と云ふ馬來語て本邦至る所に自生する蕁麻科の宿根草である、高四五尺乃至丈餘に達す分根に依つて繁殖し第三年に至りて收むることを得べく爾後毎年一回乃至二回刈り採るべく其纖維頗る强靱にして光澤に富み且つ美麗に耐久性あるが故に歐米にては大にこれを賞用し本邦にては夏時の着衣に用ひ琉球丈布、越後縮の原料はこれである然れども其内皮纖維は其内部の木質と分離し易からさるを以て大麻亞麻の如く全く器械に依つて製し難し從來我邦にては專ら手工に依賴するが故に勞費多く隨つて其價貴かるべく何とか改良の策を講したきものである

蕁麻はこれも山林に自生するもので北海道の叢林などに甚しく繁茂し高五六尺に達するものありこの纖維を以て美麗なる麻布を製することを得べくこの草は苧麻に似て莖葉に刺毛あり故に俗に「いらく草」又は「いたく草」とも云ふ更らに細葉蕁麻と云ふものあれども多く纖維を收むるは通例の蕁麻である多くは繩索に用ゆるものにして就中漁具に用ゆる時は海水を含み其質最も强靱にして能く久しきに耐へ又五月頃其嫩莖を摘み煮てこれを食すべく西洋にては此根を採りて黄色の染料に供し其莖葉は搗き爛らして生汁を搾取り綠色の絨布を染るに用ひ美麗にして久しきに耐ゆ其他蘇格蘭の貧民は其莖葉を煮熟して食料と爲し瑞典に於てはこれを栽培して畜類の飼料に用ひ殊に牝鷄を養ふに宜しく其種實は畜類の爲には興奮の効多く奸商輩の駑馬を賣せんとするに際し豫て此種實を食はしむると云ひ又英國に於ては此莖葉の生汁を搾りて或酒類に加へ稀薄下劣の酒を釀しこれを蕁麻酒と云ふとか

黄麻は田麻科に屬する一年草で和名「つなそ」又は「かなびきを」と云ひ印度の特産なれども我邦豐後、伊豫其他四國九州に栽培せられ高五尺以上に達し其性濕潤炎熱の氣候を愛す、纖維は粗硬なれども其質强きを以て西洋にては織りて敷物となし又貨物の包裝に用ひ世に「ブック」と稱するものと原料はこれである我邦にては專ら疊絲、綱、繩等に用ゆ

其他麻尼刺麻などあれども上品ならず。以上の纖維は總て植物界に於て其組織を構成する主要なる物質にして各々强靱硬固の性ありて内皮纖維、構造纖維、表皮纖維に別つ故に纖維は其原料の形狀長短、細大、强弱、膜の厚薄、色澤、柔軟、剛直(彈力とも)等の如何に依り用途を異にすべく又特に水濕に堪ゆるものあり而して纖維は貿易品として水分を含有するの量に於て多少あれば常に一定の水濕標準に依りて鑑定賣買するものである歐州に於ては棉花は八五%大麻及び亞麻は十二%黄麻は十三七五%の水濕を以て標準として居る

更らに動物性纖維に於ては絹、毛、皮革、羽毛など多額の產出ありて植物纖維と其用途を全ふするもこれに比すれば柔軟、美麗、輕快なるもの多し兩者各々得失あるも常に相俟すこと少なく綿、麻は價格低廉にして持久の性あれは衣類として絹、毛　並び用ひらるゝのみならず現今物質的進歩と共に竟々其需用を增加するものである

絹は蠶類が繭を造る時其口より吐き出す所の纖維であるが今蠶類の種類を大別すれば家蠶、天蠶、柞蠶、樟蠶の四類にして家蠶は桑の葉を用ひて室内に飼育し天蠶以下は樫、櫟、柞の葉にて野外に飼育するものである天蠶柞蠶は共に吾人衣服の料に供すと雖とも其絲の產出使用共に少なく、又樟蠶の糸は僅かに釣客が漁獵に用ゆる「テグス」の原料のみなれば諸君が普く知らるゝ所の絹は皆な家蠶の絲である其繭一個を取り絲口を索めてこれを引けば次第に解け始め遂に解け終るまで繭は全く一本の纖維より成り其一本の長さは千〇五十尺より三千七百五十尺にして直徑は約六毛なり斯の如く細長き纖維なるが故に絲に製するに便に且つ細き絲に製出するに容易なり若しこれを顯微鏡に檢れば其切り口は圓きものと二個並びたる如きものにして彼の草綿の纖維の如き螺旋狀となり或は節あるものに比すれば其光澤も非常に美麗なり生絲の太さを定むるには「デニール」なるものを用ゆるのでこれは固と佛國の定めであるが現今我邦にもこれを用ゆ其重さ〇、〇五三一三「グラム」即ち我が一厘四毛一六六にて長さ四百七十六「メートル」即ち我か千五百七十尺八寸なるものを一「デニール」と云ひ全じ重量にて長さ二倍なるを二「デニール」と云ふ斯くの如く十一二「デニール」の絲を製出するのである

毛は主として羊毛で綿羊を最とし山羊これに次ぐこの纖維の顯微鏡下に照せば毛類の特性として鱗狀のもの附着せるを見る纖維一本の長さ長きものは五寸八分より七寸六七分にして短きものは八分より一寸二三分なり其短きものは平羅紗を長きものは綾羅紗を織るに用ひらる其の他「モスリン」「フランネル」毛布など用ひらるゝもの其だ少なくない

如上說く所、吾人生活上必要なる材料にして其衣服の如きは常に体溫を保持し其消耗を調節し以て健康を衞るを目的とす其目的を全ふするこ否とは衣服の形狀及び容積にも依るべしと雖とも主に其原料の品質に依るものである同一の綿と雖とも堅く壓縮したるものは体溫を放散すること速かなれば溫かならさるも輕鬆なるものは其容積大にして大氣を含み溫の傳達遲きが故に放散少なく隨て溫かなり例へば綿入服の新しきものは其舊きものより溫かなるは事實にして又新なしき「フランネル」は水洗したるものより溫かなりされは体溫の放散を防ぐには輕鬆にして其内部に多く大氣を含み且つ乾燥にして彈力に富むものが好い故に毛類は第一として次は木綿類とし絹又は麻類は体溫を保つに適せざるものである夏日はこれに反して吾人の体溫を保つ必要もなければ極めて薄き層を用ひ大氣の通行を宜くせねばならぬから絹及び麻類は最も淸凉を感するものである

## 追放に就て(續き)

小野吉勝

俯垂れ勝であつた彼女の優しい面は、此時初めて上つた。と見ると何處やらにいそいそした風がある。突如彼女は申しました『先生！初め彼の記事が嘘だと聽きました時、私は斯程までに氣高い先生のお心の中を疑ひましたのは、實に惡う御座いました。只今懺悔いたします、何卒私の罪を赦して下さいませ。』終に手をついて詑りかけたので、私は急に手を延ばして之を止めました。『何んの、これしきの事に詑るの、罪のとそんな事があつたものですか、私は實にあなたの覺悟の確かなのに感服しました、やれリボンが何うの、指輪が何うのと朝から晩まで虛榮滿々たる、今日の女學生の中に、あなたの樣に弱い者貧しい者に同情して、奢侈輕薄な今日の所謂貴夫人、又其の娘なる女學生に對して、眞面目に學生の體面を守り、婦人の價値を上けやうとせらるゝ婦人のあるのを見て、實に嬉しい心强い感が致します。殊に常に平民主義を揭けて居ります成女學校に、あなたの樣な方の學んで居らるゝことを思ひますと、我が校の面目も輝き出づる譯なんです

私は唯彼女の氣休めにこんな事を言つたのではありません、衷心僞らざる告白なんです。想つても御覽なさい、二十歲そこその、而かも女の子が、何で美い着物、奇麗な頭髮の飾りを欲しがらずに居られませう。欲しがるのが尤の事です、私は決して之を絕對的に不可ないとは申しません。けれども今日の女子殊に女學生は、其婦人としての嗜み以上に虛飾に陷つては居ないでせうか。唯もう自分の身のまわりの事にのみ朝から晩まで腐心しては居りますけれど一步進んで世の弱い者可哀想な人のために同情し盡瘁せうと思ふ人が幾人あるでせうか。

我が彼女も亦女子です、殊に佳い物美くしい物の欲しい女學生時代です。だからして彼女にも斯かる欲念がないとは申しません、けれど流石は彼女です、斯かる欲念にのみ齷齪しないで世の最も卑しみ最も忌める、從つて最も憫むべき新平民階級に多大の同情を拂ひ、多少の貢獻を願へる彼女の如きは、現社會の如き虛榮滿々なる時代に於て實に見上げたものではありませんか。私は實に之を以て一校の誇りといたして居ります。どうかこの美はしい立派な心を忘れないで遣つて行きたいものです。この心掛を以て、この態度で以て人生を渡るうちには、そりや何うせ迫害もあるでせう、いろいろな困難があるでせう。案外敵は自分の親近から迫つて來るかも知れません。で彼女も申しました『過日私の寓居に叔父の參りまして兄と種々な談を致して居りました。私が入つて行きました時に、何ういふ所からそんな話が出たのでしたか、叔父は頻りに新平民の階級を惡く言つて居りましたので、私は側から「何故叔父さん、そんなに惡く仰有る事もないじやありませんか」と申して、失禮とは思ひましたが叔父を詰り遂に攻擊しましたので、叔父も勃然として「ではお前、新平民と結婚したが可い」と仰有つたものゝ猶私の心事を確めやうとせられて「口では何とでも言はれやうが、實際お前は新平民等と結婚出來るかい？」と仰有つたものですから、私は極眞面目に「はい叔父樣、お父樣や兄樣が許してさへ下されば、私は結婚いたします」と申しましたので、叔父も到頭「仕方のないお轉婆だねえー」と仰有つたまゝで濟んで仕舞ひました』

もう既に彼女が實際出逢つて來た樣に、迫害も遠くより來らずして却て親近から驟しく起つて參ります。ですから斯んな新らしい急進的な思想を懷いて居る者に取つては、餘程決心を固めてかゝらねばなりません。私は全力をつくして彼女の健全な發達を扶けたいと、衷心より祈つて居ります。(完)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 谷中問題の回顧及び教訓

久保田牧民生

谷中問題は、資本家制度、精髓の縮圖である、三十七年該問題が、栃木縣會に、現はれんとする時、余は縣の一小吏であつたが、義人田中翁の驥尾に附して、反對運動に從事した、多分十一月の二十日であつたと思ふが、宇都宮壽座に於て反對演說會を開きしとき、かつて、足尾銅山の役員であつたと自稱する、小島某なる者余等に告げて曰く「谷中買收は、吾が古河家と政府と縣廳の共謀に出でたるものなれば、諸君如何に運動するとも、無効である、寧ろ運動せぬ方がよいでしよう」と「其れは余等の想像せる所と一致する、さもあらん、なれど余等は反對せざるを得ず故に行く所まで行きて止まん」と答へて居つた彼の言の眞否は、もとより知る事はできぬ、其の當時余は翁及び運動に來れる青年に、是の問題は根底が深い、故に議會や政府に請願運動位ではだめだらう、實力に訴へて、該案の縣會に出でざるよう、するか、さもなくば沈默を守るか、二途を擇ばねば、なるまいと語つた事があつた利島村の青年が余の下宿をたずねてくれたときも、同樣の事を語つたと、憶へて居る、けれども翁の熱誠に動され、請願運動即ち所謂立憲的運動に、直接又間接に、たずさわつた。

翁の熱誠も、縣吏等には、妨害者の聲とよりきけぬ、其の當時余の知る縣吏等はこう言て居つた「谷中村は、本縣の厄介村だ、縣經濟は、之れが爲めに、困難する、谷中村民は、堤防修築で、金儲けをするものだから、故意に堤防を破壞する、故にどんな堤防を築たとて、だめだこんな厄介村は、縣の爲めに壞す方がよい、田中翁は老耄して、政治は解らず、衣食の爲めに人道問題だなどゝ反對するのだ」と一世の義人も俗吏の眼にはこんなふうに映たのである。

翁の熱誠も其の効なく、豫想の如く、あらゆる手段を以て縣はやつて來た、如何なる請願運動も訴訟も屁程もきゝめがない、之は決して奇怪でない、其か當然なのだ、何となれば買收を實行する人も訴へをきく人も、同人だもの、二つ身體があるまいし、二樣に働く事はできぬ、之れを働かせようとしたのは、無理なのだ、この見易い道理が解らぬのは、こちらが常識に缺けて居つたからである、立憲宗に迷信して居つたからである。

翁の熱誠が、どの位社會の同情をひゐたか、社會主義的趣味を帶びた人の外、眞に同情した者は一人も見出し得なかつた、口先の同情者は幾等もあつた、損にならぬ、迷惑にならぬ範圍に同情したものは、幾等もあつた、社會主義の首領株の人でも、田中翁を嘲笑して居つた人もあつた之れには僕も驚いたね、こうして考へて見ると名士だの、道德家だの、宗教家などゝ云ふても、紳士閥の士や之れに近い所の人は、紳士閥協力の問題には如何なる道理があらうとも、かまはぬと云ふ事が解る。

僕は谷中問題の末日が近くなつたので、栃木縣下を同盟退去說を主張した、其れは、末日の來る事は明である、運動の効果のない事も明である、故に之のまゝになし居けば、悲劇に悲劇を加ふる事になる、吾人の目的は、一つは暴政に反抗すると云ふ事もあれど、第一の主眼は、村民を安態に居かんとするにあり、其は之のまゝにして望むべからず、且つ之の善良にして、團結の美を有する、村民を離散せしむるに忍びざればである、村民を政治論の犧牲としてはならぬ、否感情の犧牲としてはならぬとまで切論し北海にまで來て移民說を主張したが、毛ほどの効果もなく、谷中問題は遂に悲劇に終つた。

翁の熱誠と勇氣とは、今更云ふに及はずだが、殘留村民の勇氣には實に感眼に堪へぬ、之の熱誠と勇氣とが凝つても、紳士閥の一累をも拔く事ができぬ、前年の鑛毒運動も之れと同じだ、この熱誠と勇氣とが如何に、大なりとするも、立憲宗の迷信的、消極の熱誠であり、勇氣であるからである、之れが迷信を脫して、積極的であつたならば、守勢の勇氣にあらずして、攻勢の勇氣であつたならば、三十七年の縣會に、彼のビク〳〵連中は到底議案の提出はせなかつたらう、若も提出した所で、議員等は腳がきき身慄がして、到底問題にならなかつたに、相違ない。

吾人は谷中問題に就て左の事を學び得た

一紳士閥協同の事件には、紳士閥及び其れに緣の近い人士は其の所謂名士、宗教家、道德家、學者も、眞に同情はせぬ、

二紳士閥協同の事件には、政府や議會に對する立憲宗の迷信的運動は、無効である、

三紳士閥協同の事件には、消極的守勢的なる、熱誠や勇氣は如何に大なるとも、無効である、

四紳士閥協同の事件には、立憲宗の迷信を脫して、消極的、攻勢的なる、熱誠と勇氣とにあらずんば、効果なし、否な試みるの價値すらなし

吾人は之れを學び得て谷中村に感謝す。

## 新紀元晩餐會

小野吉勝

一月十五日　夜十時前後であつた、僕が世界婦人社に於ける新紀元晩餐會の歸途、獨りでトボ〳〵と番衆町を步いて居たら、急に大地が搖れて兩側の家がミリ〳〵〳〵、ガタ〳〵〳〵と動き出した。

此夜晩餐會席上の話柄に就いて、いろ〳〵の事を連想し獨り妄想に耽つて步くともなく歸途を辿つて居た僕は、この地震で現實の我れに還つた。現實の我れはトボ〳〵と雪道を步いて居たのであつた。

ふと俯いて足元をみると、雪の夜や二の字二の字の下駄の痕がついて居る。面白いなと思つて後振り返つてみると黑い瓢箪形の痕が刻まれて居た。ハテナと考ふるまでもなく僕自身の靴の姿なることを知つた。急に身が竦として寒い。

さうだ、この雪で來べき筈の連中がへこたれて來なかつたのも多からう。ほんとにひつそりした會だつたが、又こんなにしんみりした晩餐會は多くなかつたといつても可い。

此夜時刻までに集つたのは安部先生と僕とだつた、安部先生が「ジャングル」の梗概を話して下さるのだからとて、僕は筆記の準備をして行つたのであつた。けれども外は雪が降り出す、障子を閉きつて火桶を圍んでも猶寒い。あゝ今頃石川兄は何うして居るだらう、例の瘦我慢で病監にも入らないで、あの冷つこい骨にも泌み渡る牢獄で踏ん張つて居るとの事であるが、寒だらうなア——。谷中村の人々も今頃はどんなに困つて居るだらうかと考へると、猶更身がぞく〳〵する。

鼠の子一疋も來る影がないので、福田女史と炊事のおばさんと四人でぼつ〳〵晩餐に手を着け口を着けた。

木下兄より來た端書を見た、逸見兄が急に故郷廣島へ行つたので廿日過ぎに延ばしてはどうだ、自分もこゝ四五日手を放せないからとの意味であつた。けれども機既に遲れたり突で延期の余裕がなかつたのであつたそうだ。惜しいことをした。

晩餐最中に先生と女史との間に盛に戀愛問題に就いての議論が交はされて居た。僕と『オンゼ、イーヴ』を持つて傍に居た要君とは唯謹聽するばかりであつた。要君は猶前途有望の青年である、此問題に就いて他日大に煩悶し懊惱して痛快なる論決を得るのであらう。然るに僕は何うだ、語るも實にお羞づかしい次第ながら既に敗軍の將である。此興趣深き大問題に對して一言容喙すべき資格の缺けたものである。要君の謹聽は前途に希望の影を提へた積極的のそれである。僕のは消極的の沈默に外ならなかつた。

晩餐は終つた、女史は其舌鋒を磨いて益々追究する。先生はやゝしどろになつた。遂に女史の手中に陷つて其小說よりも奇なる主人公の物語を話された。我ら聽衆はいかにもと首を縦に振つた。何なるしんみりしたる暖き物語なりしよ。天機竟に洩らすべからず矣。

女史は久し振りでとて八雲琴を取り出でた所へ赤羽君がのこ〳〵入つて來た。「自由の歌」一曲を聞いて安部先生は汽車で其巢鴨の住宅へ歸るべく腰を上げられた。

僕は猶止つて八雲や月琴を聽いた、女史は月琴に於ては免許を得て居るそうで、流石に自由自在ではあるが僕は八雲の音が好きだ殊にあの今樣調の「自由の歌」が何とも云ぬ僕は習いたくて堪らぬ、是非習はねばならぬと獨り誓つた。

阿部先生と同じく僕も是非一度著者たる木下兄の前で「靈か肉か」の批評會否質問會を開きたいと思つた。いづれ實現出來るだらう。

## さすらひ

神川松子

思ひ寂びれし夜半の枕
夢の薫りは嵐に荒さび
遠音もどろに雁の憂く。

秋更闌けて想はつらく
獨り窓の邊夜風に馴染み
汝荒涼の友としかたる。

あはれ嵐につかれし魂の
花の世いつか萎み果てゝ
今宵秋の夜凋落の影に泣く。

人の子誰か愛着の
情思に泣かぬものやある
燃ゆる血恒久に煩悩あり。

夢になづみし戀路の花も
露一時の生命にて
破れてはつらし痛手の胸。

せめては今宵寂寞の胸を抱いて
秋の野里にさまよへば
友もなみたゞ追懷のたねにして。

あゝ思や淋し　うら淋し
戀ふ人もなみ若き我が胸は
唯思根寒く秋風のふく。

寂びて空しきひとり見の
月の光はかけほのぐらく
古りにし戀を恨むに似たり。

味氣なの人世思ふも仇と
駒の緒とめてわが世に行けど
さかくは迷路昏迷は多く
いくた花の香憧れこゝち。

あだし人の子夢路に醉ひて
浮世の絆纒にこの身を燒けば
今更呪ほし古りにし戀の
君が温情ぞ怨嗟は多し。

うらみ浦和の波あれて
しづ心なく闇路を行けば
しるべは遠み漂浪の人。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 對新平民觀念の地理的現象

みよしの

一、畿内は如何

僕の郷國大和は、青丹よし奈良の都か何とか角とかで、古いのを誇りとして居るだけに、所謂新平民の部落が此所にも彼處にも到る所に散在して居る。随つて之れに對する舊平民の感情に種々の變遷があつた。大和には元來これはと云ふ大名がなかつただけに、廢藩置縣になつて後も士族が勢力なく、從つて跋扈しないので、平民階級は之等に對して殆んど何等の痛痒を感じなかつた。

處が舊平民階級か新平民階級に對する惡感は中々嚴しかつた。殆んど禽獸視して何等の交渉もなかつた。僕か物覺えた頃、左樣今から十數年にもなるだらう、まだ彼等を忌み卑しんだ事は甚しかつた。彼等の職とする所は其特色たる革職、履物職、賣肉などである。概して彼等の部落は舊平民村落より懸け離れた所にある。其所より彼等は日毎に市へ商買に出て來る、町家では履物を買ふ。時には肉を買ふ。で彼等は荷を卸して取引する。けれど履物のまゝ閾を跨ぐことはならぬ、必ず跣足とならねばならぬ。幸にして斯んな事もいつの間にか廢れると、今度は一服截かして呉れと煙草火を要求める。町家では火鉢のまゝ彼等に火をもてなすは中々に潰れ多いといふので、火箸で挾んで庭に投げて遣つたのであつた、情深い人とてもやつと投げなかつたまでの事であつた。でそのあとは鹽を蒔いて潔めたものであつた。これは無理もないことである、何故かと云へば當時の人々は牛肉を喰べるなんてことは實に獸らしい怖ろしいことの様に思つて居たんだもの。やゝ物の解つた連中でさへ神棚のある室では之を食ふことを憚つて、物暗い室の隅を撰んで宛然竊んで來たものでも喰べる様に、こそこそやつたのであつたのだもの。そして可笑しい事には口中を洗つたのは可いが、まだ肉の臭の紛々した呼吸を吹掛けなから、神棚に燈明を點して殊勝振つて居た。少年なから僕は滑稽に思つて居た。

何百千年と云ふ永い間其執る職業の醜い爲めに、人間階級より度外視せられ禽獸視せられた結果、遺傳も手傳つて居るのであらう、彼等自らも我等は人並に交際の出來ぬ下等人種であると諦めて仕舞つて、此「あきらめ」こそは彼等を自暴自棄の卑屈者にして仕舞つたのである。社會は之を侮辱し度外視する結果、彼等に教育を與へない。又社會に反抗してまでも教育を受けやうとするの勇氣は彼等に毫末もない、よしあつた所で社會が容易に許しては呉れぬ。無教育の結果はすぐ不衞生と來る。自暴自棄に滿足して居る彼等の生活は實に豚の如しである。其不潔其卑陋といつたらない。傳染病の多い中にもトラホームが最も著しく、新平民とさへ言へば直ちに赤く爛れた瞼の彼等を連想するのである、實に爛れ目は彼等の特徴である。

處か十年後の今日に於ては事情がやゝ變遷して來て居る。百姓家でも町家でも少し金か出來ればすぐ牛肉を食ふ、客が來る、それ牛肉だ、喧嘩の仲裁がある、それ牛肉だ、何でも角でも肉の世の中となつたと共に、彼等か新平民に對する感情も大分に和いで來た、肉を賣つて、雪駄を賣つて、町家の閾を跨ぐに何の遠慮も要らぬ。煙草火を貰ふに据附の火鉢より點ける、何の憚る所があらうか。一般舊平民の固陋な感情が開けて來たのと共に、彼等新平民の自覺も出來て來た。と云ふのは彼等の部落にも小學校の片割れか出來る、然らざれば舊平民部落の小學校に小さくなつて通へる、財政の餘裕のつくのは醫者に罹つて其病氣を治して貰ふ。僕の兄は郷里吉野山の麓に醫院を開いて居るが、所謂新平民にして治を請ふ者尠くない、甚い爛れ目か全癒したの衷心から僕の兄を尊敬して居る者澤山ある。彼等の階級からも區會議員村會議員か出て村治に參與して居る。僅かの間に大分思想か進歩して來たものだ。

けれど未だに感情のどん底では輕蔑し擯斥して居ることご夥しいのである。子供か喧嘩する、先づ口論をやる、「やい穢多！」「こら新平民！」と云ふので中々手嚴しい罵嘲の語である。「穢多」といふは色のドス黒い最も醜き蛙である。斯の如き子供が大人となる、何うして中々この感情が全く融化されやう、それはまだまだ遠いことであらう。けれど一歩一歩この惡感情が薄らいで行つて居るのは事實で、爰に我等の努力に對する慰藉光明があるのである。

あゝ、いつ婚嫁を通ずるに至るであらう！？

二、九州は如何

九州と云つては餘り漠として居るから、僕は鹿兒島附近の事をいふのである。流石大藩の所在地であつただけに、今日に於てすら士族平民間の懸隔は甚いのであるさうだ。僕等の頭から割り出して「何に貧乏士族が」と輕蔑してかゝつても、實際は未だに其言葉にさへ上下の區別があるさうだ。だけれども平民階級が彼等士族に對しては、あまり反抗心も惡感をも有して居ない。却つて同じ平民階級の所謂新平民に對する惡感が中々激しい樣だ。何故かと云へば、從來新平民階級なるものは一般平民より禽獸視せられて交際はなかつた爲に、若し何か過ちでもした所で舊平民は、猫にでも嘗められたか又は雨蛙に小便でもひつ掛けられた位に思つて、馬鹿らしくて眞面目に怒れなかつた事であつた。所が平民の操行は頽れ一般に墮落して來たのに反して、今まで禽獸視して居た人間外の人間がヌクヌクと頭を擡げだして來た、四民平等の叫びは何百千年來踏まれ躙られて來た彼等の階級にも傳はつたので、ほつほつ奮起し始めたのである。そこで舊平民の嫉妬となり、あらゆる迫害を試むるに至つた。畿内近邊で一二十年前に經て來た侮辱迫害を、今此所では事新らしく、それよりも猶一層激しく其黑き手を憐むべき彼等の頭上に下しつゝあるのだ」

僕はそれ以上論はぬ、其迫害の如何に甚しきかは薩摩隼人の年來の行動よりして想像して貰はねばならぬ。唯九州に於ては中國に於けるよりも惡感情の激しきことを了知せらるればそれで充分だ。

三、東北地方は如何

僕は一日友人の寓居を叩いた際ふと「追放」一件の話をした。丁度この友人と云ふのは東北地方即ち山形縣の人で、折ふし其郷里出身の學友が數名居合せたが「何故そんなに迫害するのだらう？」との怪訝の相が誰れの面にも著しく表はれたので、僕は却つて之を審み反問の態度で之を糺した「君等の地方では斯んな事がないのかね」「そうだとも、そんな事があつて堪るものか。僕等少年の時には「新平民」なんていふ言葉さへ聞いた事がないんだ者、偶々小學校の教科書にあつて先生に説明されたので、やつと「そんなものがあるのか知ら」と思つた位だもの。二三年前だつたかね、そら「破戒」が出て文壇を騷がしたことがあるだらう。どの新聞を見ても非常に感を惹いた様に書いてあつたが、僕等には世人が何故あんなに新平民を虐めるのであるかと云ふ事實が解されないので、「破戒」を讀んで殆んど何等の感興をも惹かなかつたよ。却つてあんな小説を書いた人の心を疑つた位なんだからね。」一友傍より口を挾んで『僕は福島だが新平民の話は聞いたことがあるが、彼等に對して迫害の何のつて見たとはありやしない。』『對新平民觀念なんて殆んど我等の間にないのは、彼等の部落が極稀れだからだよ。だけれど山形市の東南一里弱の所に字を熊林といふ部落がある、此所が彼等の唯一の屯所であるが、其他に散在して居る彼等の或者は皆普通平民と婚嫁を通じ同等に交際して居る。彼等熊林の連中は現在執る職業が賤業だし、あまり餘裕のない連中なので幾らか賤しめられて居る。だけれども彼等は彼等の面目を回復せんがために、取引の際間違つて彼等に多く渡した處で、彼等はそれが一厘二厘の小錢ですら必ず返却する。のみならず彼等の量目は至つて正直である、値段が安い。そこで一般の人とは彼等より買ふを得策と考へて居る位だ。何うだね君、此點に於て東北地方は九州よりも中國よりも開けて居るじやないか。」

僕は尤もだと首肯いた、のみならず同じ日本の内でもこんな嬉しい所があるのかと感心した。

四、結論

素より僕は此問題を深く實地に就いて研究したのではないから、例外があるかも知れん。けれど今述べた様に地理上の大體の現象を總括して見れば、西南部即九州は此對新平民觀念最も激甚に其憎惡を示し、中部畿内近邊は逐日此惡感の減退の傾向あり、而して東北に至るに從ひ漸次融化しつゝあるを見るのである。

羅馬の成るは一日になつたのではない、此惡感情的な階級思想の全く消滅し、四海擧つて、吾が同胞よ」と手を握ることは近き將來ではなからうけれど、一歩一歩頑固な感情か開發されて行つて居るのは事實だから、之をせめてもの勵みに吾等歩調を揃へて奮戰せねばなるまい。

## 足痿み

德永狂風

ふと白きおん手のひらに生やかの血糊どにほふ汗のごとくに
あゝ足痿みわが痛ましき生の路つくる日のなき宿命に泣く
わがゆくて眞向にあたり星ひとつ落ちぬかなしき空を旅する
京の家二階の窓にわが姉と薪家のやくる夜半の火をみぬ
一人に飽かすもとめし血と涙五人にしも思ひかけゝれ
うたがはしめ歡ばしめしみ力はこの夕にはわれを泣かしめ
冬の海あざむとやうに冷やかに我にものいひさびしく笑ひ
光なき生につめたき灰を食みありぬさびしき胸をかい抱き
冬の風叫びをあけて空をふき嘘をつくれぬ落葉林に
街はつれさびしき冬の日の風は砂と落葉を面白う捲く
銅の金毒をふくてふ緑青の花さきにけりいと蒼やかに
あゝ肉のおごろへ人は眼ざしの鈍き光に淋しさをいふ
あな痛まし胸の埴生の通ひ路に轍の痕のいくすぢを見る
きたなき眼ひたすら燃えぬ何にかに嗾かされてあるかの我は
そもわが手何に懷ふやわなわなと身内はつよき地震する心地
玻璃の窓はこりに陰り高照らす日の色をみず灰色の家
もえ骸とある燃え骸はあひ抱き相泣く燃えぬつめたき牛に
牛背に毒をふくなる瓦斯の火のにほひを思ふ人やかろゝ日


Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

消息

## 幸徳秋水氏より

其後は御無沙汰、御變りもありませんか

然れば此程紐育のドクトル、ホフマン翁から、數部の文書を送つて來た中に、貴姉へやつてくれと言て『ゴッドペスチレンス』と題する小册子が一册ありましたから別封にして郵送致ます

其中に金子コンガー女史のシカゴ會議デーリイに載せた論說の切抜きを挿んで置ました、是れもホフマン翁から貴姉の雜誌に譯載するに良いからと言てよこしたのですが遼路のと故、紙が破れて分り惜くなつて居ます

扨て其『ゴッドペスチレンス』には別に言傳が添て居ます、實は東京出立の前、小生はホフマン翁に用事があつて手紙出した序に、貴姉が基督教を信じて困るこ言てやつたのです、怒つてはイケません、所が翁は今度よこした手紙の中に、之に對し大に嘆惜の語氣で左の通り書てあります

『彼女が宗教的であるこは、予の驚き且つ怪しむ所です、道德を守るのは常識の方法で澤山です、どうか小生の眞心を籠めた贈物だといつて『ゴットペスチレンス』を彼女に送つて下さい彼女は實に女丈夫です、而も眞正なる革命家は主こか神こかに關らずして活動するのです、小生の知れる限りに於ては日本語には神(ゴッド)てふ意味の語はなかつたです、カミこいふもシンこいふも、フクノカミこいふのも世界の創造主こしてのゴッドの觀念を表したものではないでしやう、思慮ある人間は確かに斯る欺瞞を信せぬ筈です、神(ゴッド)てふ語は實に人類を愚昧ならしめんが爲めに、僧侶等の製造したものです、社會黨や無政府黨は決して信心、信仰、信條なぞを有しません』

以上ホフマン翁の語です、貴姉の意に作ふか知れませんが、是れは歐米の革命家一般の思想を代表したもので、殊に翁の親切こ熱心は十分に御認めなさるとこ存じます

猶ほ御覽になれば分りますが『ゴットペスチレンス』は『神てふ疫病』の義で、ジョンモスト氏の名著です、モスト氏は御承知の通り獨逸の無政府的社會黨で、ベーベル等の議會政策派こ分離して獨逸を逐はれ、永く米國に住して壁壘を有して居したが、一昨年三月死去しました

返事を御やり下さい、左うでないこ小生が其儘打棄てゝあるやうでは悪いのですから

別封冊子御受取の上は、直ぐホフマン翁へ御念の爲めホフマン翁の住處を書た名刺を封入して置きます

世界婦人は依然發行を繼續して居ますが、小生は去十月末東京發の後、一部送つて戴いたきりです

小生の病氣は相變らずで弱ります、ボツ〳〵翻譯をして居ます、世界婦人が出て居るなら十一月からの分を揃へて御送りを願たいものです

一月廿四日　幸徳秋水

福田女史机下

## 野上冷星氏より

拜呈貴社益々御清榮の段賀し奉ります尙益々御驍健に主義の爲め御奮鬪あらんとを切に祈ます

余は男子の性を持ちながら主義の爲に盡すこゝの無いので貴姉等の御活動を觀ては唯々慚愧に堪えない次第であります

余は社會主義者たらんかキリスト者たらんかの問題に付ては久しく煩悶して居りましたがトウ〳〵社會主義を去りて基督に行きました所謂肉を去りて靈に付きました、さりこて余は社會主義を排斥する者ではありません矢張り社會主義者こ共に人道の戰士こなるの覺悟で有る只相違する所は本位をキリスト教に置くこ云ふ丈であります

貴社は新紀元社であるこ云ふこさを先々號の紙上で知りました時は小生の喜びは非常でありました、それは云ふまでも無く貴社の主義主張こ余の思想こが多少こも一致して居る所があるではあるまいかこ思ふたからであります、然し余の誤解かしれぬ

余の世界婦人を愛讀するの以所は宗教的信仰上より社會主義を主張せらるゝからである信仰の無い主義は砂の上に建てた家の如くであるこ思はれます

日本國の社會主義者中では安部先生は余の理想に最も近かい人だこ思ひます其次は木下君石川君こ云ふ順です

余の主義は人道主義こでも云ふのが一番的て居るでせふ

＊　＊　＊　＊

近日はあまり雪も降りませんが昨秋十二三日頃より本年の三日頃迄は非常に降りました此の日間に家根より雪を落した事は五回です一回の積雪四尺余位つゝあります只今でも平地の積雪は六尺以上有ります家の軒は雪の中に有ります、くだらぬ事を申上て申譯ありせまん不文不才の余は是れ以上に書くこさを知らぬ御諒察あれ

## 田中翁より

日本はやつこ、四十一歲になつたけれごも多病で其健康の優劣を比ぶれば、此六十八になる正造ごんよりは、ヨツポド弱いようです此端書は今年正月の御祝、更に謹んで世界婦人の萬歲をいのるなり

戊申一月三日

## 舟木一義氏より

柔和な優しい未逝いて滑稽な殘忍な申來る然公にして冠するものこ世に爲にそれのみならんや增税又增税かくて年一年こ吾人は生活難に苦殺されんこす、乾坤の旋轉又科學的にも些の「お目出度さ」を感ぜざるのみかは却て大に之を呪ふのみにて候よ然れごも歷史は繰返すこ果して眞ならば年々歲々花は相同じく今も獸の子こ退化す人の子か困轉の果てはやがて覺醒し來るや世界の同胞か一齊に九天に悲號するの時は即ち吾等の新天地自由の樂土たるべく此意味よりして年の移るは聊か「お芽出度さ」を感じ申候玆に到り謹んで貴姉の健勝こ光榮こを姉妹のため是に禱り上候豚兒亦此地に飢えこ寒こを凌ぎつゝ再戰の準備中に有之候

尙ほ貴紙二十一號の紀念號滝田町杉戸齋藤方より轉送し來り申候所まだ十九、二十の兩部到着せず爾後如何かこ案じつゝ待居候依て恐乍ら留後は肩書の宛にて引續き陸續講讀の榮を得度尙は如上の二部欠本に付御進送願上候前金は別に後より郵送申上べく候間此旨不悪御容恕なし被下度折角御健鬪願上候早々、短篇の拙稿近々投じたく存じ居候

## 安部磯雄氏より

昨日轉宅致しました十五日(晩餐會)には早くより伺ひます

府下北豐島郡巣鴨町千四百九十三番地

## 岩崎秋月氏より

飛雪紛々寒風膚を劈く筆硯益々御雄大爲庶民此に賀すべく候政界怒濤今來らん女史議堂の下にあり解散の一撃あれば直ちに電話一打あらん事をこふ

## 内山愚童和尙より

革命は近けり善良なる平民は增税に苦しむ、今や吾等は改まる年こ共に新たなる武器をこつて立つの止むなきに至れり、幸に平民の爲めに健全なれ

## 黒瀬春吉氏より

平民の家庭には苦しい大晦日は有るが樂しい正月は有りません

餅も搗かずお飾りもせず今年も情着して春の寒さを迎へました、千駄木の家には立派な能舞臺が出來たこ云ふ事です、

## 新刊紹介

德田秋聲著『母の血』（定價金七拾錢　郵税金拾錢）

噫母の血『母の血』讀了して人生の悲哀こいふものに觸れぬ、概略を申すは著者になめけなり、いこものうしされご淋しき家庭、固陋なる人情、遺傳こいふものに對する惑ひ、はかなかりし戀路、くねりかへりたる松ヶ枝にすさ荒ぶ風の聲悽まじくして、秋の入日のあはれなる橾にも似たり、よくうつし得たり、感境深き小說霧降る宵、徒然なる折りふしの讀物、又讀書家の必ず一讀すべきものならん（日高有倫堂發行）

書畫骨董雜誌

一部金六錢十二部前金五十四錢
廿四部前金一圓(毎月一回發行)
第十六號二月一日發行

東京駒込東片町七十　書畫骨董雜誌社

振替貯金番號第六八八九番(振替貯金にて申込みは一口金一錢增)

## 謹告

福田英

新年には早々四方の愛讀者諸氏より懇篤なる御祝詞を賜はり數ならぬ身を斯くまで御引立て下さるお思召に只管感泣致しました尙今年も一層努力致しまして諸名士の御高說を御紹介致しまするから舊に倍し御愛讀を願います御約束の二葉亭先生も本月は非常にお忙がしいので御違約致しましたが來月は是非御願い致します悪しからず御宥恕下さいませ、私の詰らぬ旅行記も記事輻輳故次回に廻しました御宥恕下さいませ

ユニヴァサリスト

二月三日　第三卷　第二號

一年分四十錢

△科學宗教調和の福音を唱道してより玆に三年

△本號にはユニヴァサリスト講壇の五大說教(赤司繁太郎氏)杉山重義氏の論說雜錄には歐州思想界に喧びすしきハンムラビ法典の、こ齊木他醉氏ファウスト論等其他材料豐富△一ヶ年分前金に四十錢を添ゆる人には『萬民救濟の福音』(定價一圓五十錢)の大冊殘本あるだけ進呈すべし至急申込なくんば殘本なきに至るべし

東京市小石川區小日向臺町二丁目二十七番地　世光社



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

全誌悉く寫眞挿入優美艶麗畫報兼備

# 婦人世界

二月一日發行　第三卷第貳號　一冊拾五錢郵税一錢五厘　六冊共郵税九十錢　二冊貳圓七十五錢

いよいよ佳境

**男女結婚論**　村井弦齋

◎習字は如何にすれば上達するか……御歌所寄人　坂正臣

◎鶯に關する古來の名歌……◎弦齋夫人　牛肉輕手料理

◎商人三枝氏の家庭……◎(小説)思ひ出

◎米國女學生寄宿生活(川瀬富美子)

◎私の母より受けたる家庭の教訓……横河工學士夫人　横河下枝子

◎婦人の愼むべき言葉使ひ……東京女學館　西田敬止

◎私は山脇女史を如何に見るか……栗塚代議士夫人　栗塚龍子

◎良人を助け小供を教育せる私の日常生活……鳩山春子

◎斯くの如き女學生は必らず成業す……白露

◎少女美談……時計物語

◎日本婦人渡米實驗……(跡見)

◎注意すべき小兒の夜啼き……醫學博士　加藤照麿

懸賞　△習字△家庭笑話△寫眞△家庭の重寶△文字合せ△繪探△歌△俳句

▲本號には第一號の懸賞珍附錄當選發見法あり

東京南紺屋町十二　實業之日本社　振替貯金三二六番　賣捌全國各地書店

伊藤銀月著

新刊小説　**出潮**

(定價金六十錢郵税拾錢)

時代を描き時代の人時代の生活時代の葛藤を描き極めて眞摯に極めて深刻に且つ極めて妥當に文章亦平淡の裡に秀潤を包み之を讀む者必らず其血を沸かして胸に新潮の励け來るを覺ゆべく而も讀み了つて頭に何物かの殘れるを認め怡然として獨り滿足せん

田口掬汀氏著　鏑木清方畫

(挿畫三枚上製美本菊版紙數四百拾頁)

新刊小説　**追恨**

之れ運命に破れたる個性の哀史也現代社會一部の寫生圖也、極力現在を活寫せる小説也、分量に於て坊間鬻く所の書二册を超ゆ

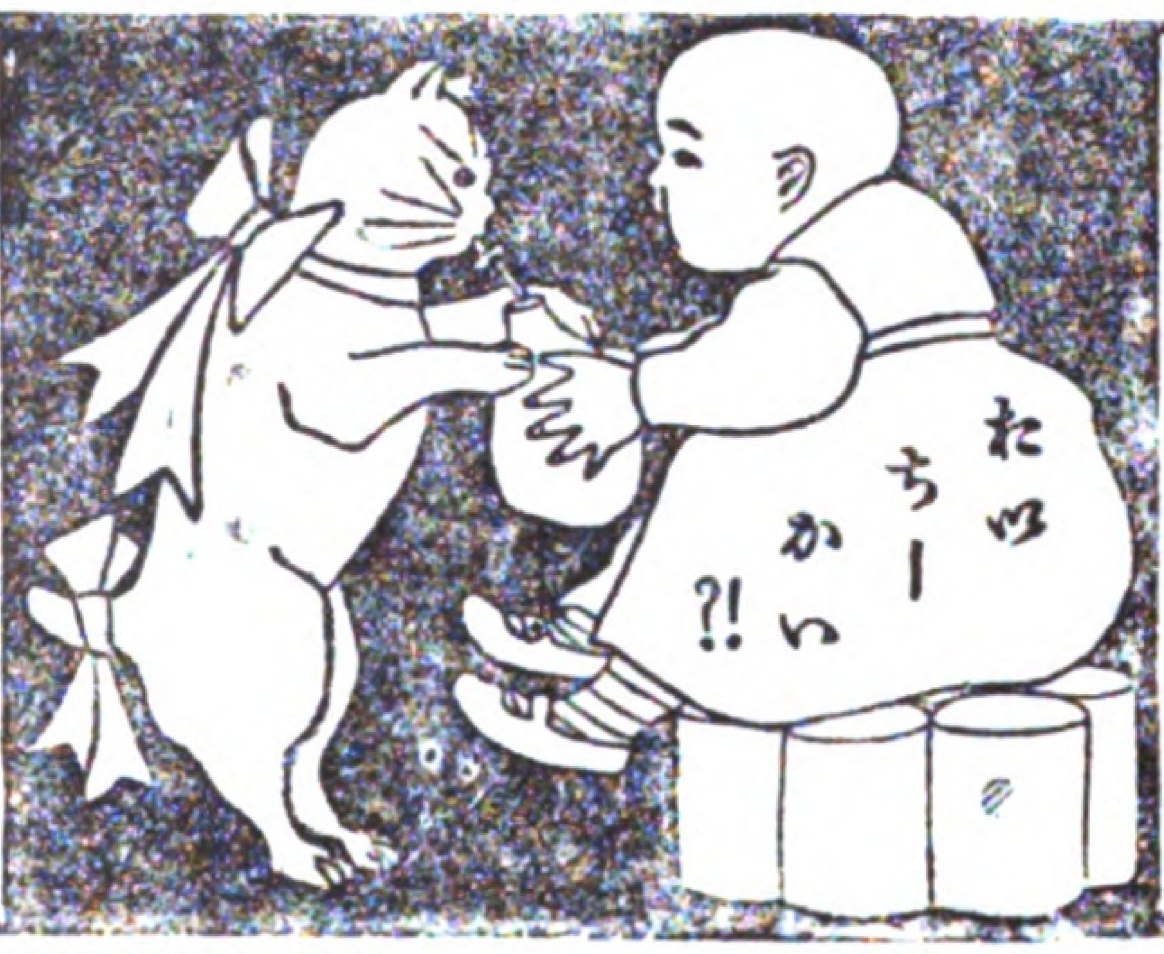
○定價金一圓○○
○送料十二錢○○

發行所　東京市本郷區天神町二丁目廿五　日高有倫堂

特賣店、東京堂、至誠堂、前川、上田屋、大阪寶文館、福音舍、筑後菊竹

伊豆三島 花島煉乳場製　名譽ある　**金鵄ミルク**

發賣元　東京市日本橋區大傳馬町　逸見山陽堂　(電話浪花二一五番)(振替貯金口座三九六番)



歯科治療　自午前八時至午後十時

吉瀬歯科醫院　院主　吉瀬才市郎

東京神田須田町二十六番地(萬世橋内右横町)

●藥價手術料共半額
●貧困者施療

雜誌　**新紀元**　自初號至終刊　十三部

基督教は靈界の社會主義、社會主義は物質上の基督教なりと信じて、靈肉合致の實現に志し、安部磯雄氏が冷靜なる論壇、木下尚江氏が熱血の才筆、石川旭山氏が深刻なる筆致其の他多くの着實なる文章、號を追ふて愈々深潮、大いに革命主義を鼓吹し、險阻を平げ、深谷を埋め人の道を直くせんとの大願ありしも終に十三號にして廢刊せり、今や殘部尚二十組ばかり書架に在り志ある人のため一組金壹圓參拾錢にて郵送す、希くば當世界婦人社宛にて御注文を給へ

宮崎八百吉君譯

アウガスチン　**懺悔錄**　定價七十錢　郵税八錢

肉慾の甘樂、罪惡の苦悶、人生の哀別離苦、花林孤影の大泣哭、而して後清亮なる聖徒的獨身生活嗚呼是れ血あり肉あり良心ある代表的偉人の懺悔錄なり、明暗不磨の見神在り恰號徹底の歎會在り、信者不信者之を讀んで其の自個寫眞鏡なるを知れ、

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目　警醒社書店

本舗　らいをん歯磨發賣元

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の肌には殊に効驗著し

定價　大瓶廿五錢　瓶入十五錢　袋入五錢　小袋三錢　罐入十三錢

東京神田柳原川岸　小林富次郎

●心理學綱要(第四版)　文學博士　元良勇次郎先生著　定價一圓　郵税不要

●最新論理學綱要　文學士　紀平正美先生著　定價一圓　郵税不要

●加拉太書研究　宮川正作先生著　上製一圓廿錢　並製一圓　郵税不要

●基督者之成功　米國トーレー博士著　新井正平君譯　上製四十錢　並製三十錢　郵税不要

●平民の講談　定價廿五錢　郵税不要

●舶來アスターライブラリ　右取揃へ御注文に應ず　實價九十錢　郵税不要

●獨乙文聖書物語　野邊地三右衞門君編(好地田太郎君悔譯)　實價卅五錢　郵税四錢

●鐵窟の廿二年　定價廿五錢　郵税六錢
強盗放火、殺人、強盗、破獄の大獄を犯して入獄し獄中不計も基督の教を受けて新生命に入り前非を悔いて竟に善良なる生涯を遂るに至る懺悔談なり

●諸病治療及諸法術原理　思念術　松橋吉之助君著　定價卅錢　郵税不要

發賣　聖書販賣　中庸堂書店　東京神田區駿河臺紅梅町拾貳番地　(振替貯金口座六三三〇番)

◎定價　△一部六錢○十部五十五錢○二十部壹圓
△申込は總て前金の事

東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　發行兼編輯人　神崎順一

東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　印刷人　遠藤友四郎

東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　發行所　世界婦人社

東京市京橋區新富町六丁目七番地　印刷所　活文社



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY